

# 有田遺跡

第2集

—福岡市有田古代集落遺跡第二次調査報告—

福岡市教育委員会

1968

## 序

有田遺跡の緊急調査は、国および県の補助を受け2ヶ年にわたって、九州大学文学部考古学研究室、有田上地区画整理組合および土地所有者の方々などのご指導とご協力を得て実施しましたところ、予想以上の成果をあげることができました。

このことは、ひとえに関係各位の文化財に対する深いご理解とご協力に負うところが大きい証左といえましょう。

一年次の調査結果は、前年度に概報として刊行しましたが、今回の2ヶ年継続調査の集大成をまとめたこの調査報告書が、わが郷土古代文化研究の一資料として、各分野で大いに活用いただければ幸いです。

なお、本書の発刊にあたり、調査および原稿の執筆を担当された九州大学文学部考古学研究室ならびに航空写真を提供くださった朝日新聞社をはじめ、県教育委員会など関係各位のご協力に対しまして、深甚の感謝を申し上げます。

昭和43年3月31日

福岡市教育委員会

教育長　長　東　正　之

# 目 次

## 第1章 調査の概要

## 第2章 調査の記録

I	29街区溝状遺構	5
II	13街区竪穴住居址および奈良時代炉址	8
III	27街区竪穴住居址および掘立柱穴	12
IV	18街区竪穴住居址および溝	15
V	31街区溝状遺構	17
VI	17街区竪穴住居址および溝	19

## 第3章 有田遺跡をめぐる諸問題

I	有田遺跡の上層器とその性格	24
II	有田遺跡発見の出土古代米	28
III	有田遺跡発見の球状酸化鉄の冶金学的分析	29
IV	律令時代における早良平野の開発	30

## 第4章 有田周辺の遺跡・遺物

I	早良平野出土の土器・石器	35
II	城ノ原出土の丹塗磨研壺	39
III	有田窯棺遺跡の甕棺と銅戈	40
IV	飯倉の甕棺と細形銅劍	41
V	白塔発見の人面鋳出銅戈	42
VI	五島山古墳	43
VII	重箱式石棺	44
VIII	野方発見の珠文鏡	45
IX	羽根戸の装飾付器台と塚	46
X	城ノ原廃寺	47

## 第5章 結

び	48
---	----

## 図 版 目 次

- 図版第 1 有田遺跡周辺の地形  
図版第 2 遺 蹤 全 景  
図版第 3 (1) 29, 31街区  
(2) 27, 31, 29街区  
図版第 4 (1) 29街区溝状造構第三層土器出土状態  
(2) 29街区溝状造構完掘状態  
図版第 5 (1) 29街区溝状造構第 2 層上器出土状態  
(2) 29街区溝状造構第 7 層土器出土状態  
図版第 6 (1) 13街区全景  
(2) 13街区堅穴住居址  
図版第 7 (1) 13街区第 3 号炉址  
(2) 13街区第 1 号炉址  
図版第 8 (1) 17街区全景  
(2) 17街区堅穴住居址完掘状態  
図版第 9 (1) 17街区堅穴住居址  
(2) 17街区堅穴住居址土器出土状態  
図版第 10 (1) 27街区第 3 号堅穴住居址  
(2) 31街区溝土器出土状態  
図版第 11 (1) 18街区発掘区域全景  
(2) 18街区東西溝上器出土状態  
図版第 12 (1) 有田遺跡出土の古代炭化米  
(2) 有田遺跡出土の球状鉄（顕微鏡写真）  
図版第 13 拝塚・重留の航空写真  
図版第 14 (1) 白塔出土の銅戈  
(2) 有田出土の銅戈  
図版第 15 羽根戸出土の装飾付器合細部

## 挿 図 目 次

- 第 1 図 有田遺跡概要図（塩原勝利製図） ..... 2  
第 2 図 第 1 次調査発見の堅穴 ..... 4  
第 3 図 29街区溝状造構実測図（松本肇、藤口健二実測、藤口製図） ..... 6  
第 4 図 29街区溝出土遺物実測図（橋口達也、藤口実測、松本製図） ..... 7  
第 5 図 13街区発掘区域実測図（塩屋、上田和子実測、上田製図） ..... 9  
第 6 図 13街区堅穴住居址実測図（黒野肇、上田実測、上田製図） ..... 10

第7図	13街区炉址実測図（黒野、上田実測、佐田茂製図）	10
第8図	13街区出土遺物実測図（上田実測、製図）	11
第9図	27街区第3号竪穴住居址内貯蔵穴実測図（佐田実測、亀井明徳製図）	12
第10図	27街区発掘区域実測図（亀井、佐田実測、高倉洋彰製図）	13
第11図	27街区第3号竪穴住居址実測図（佐田実測、亀井製図）	14
第12図	18街区発掘区域実測図（亀井実測・製図）	15
第13図	27、18街区出土遺物実測図（亀井実測、高倉製図）	16
第14図	31街区出土遺物実測図（高倉実測・製図）	18
第15図	17街区発掘区域実測図（上田、塙尾実測、真野和夫製図）	20
第16図	17街区竪穴住居址実測図（佐田、徳永博行実測、真野製図）	21
第17図	17街区出土遺物実測図（徳永、真野実測、塙屋製図）	22
第18図	土師器編年要図（小田富士雄作成、橋口製図）	25
第19図	立花貝塚上層の土師器実測図（松本実測・製図）	27
第20図	炭化米共伴の菱形土器実測図（橋口実測・製図）	29
第21図	太宰府城司南方発見の鉄鎌	30
第22図	早良平野の条里図（日野尚志作成）	33
第23図	早良平野の地形と遺跡（塙屋作成）	34
第24図	早良平野出土の遺物実測図（1）（塙屋実測・製図）	37
第25図	早良平野出土の遺物実測図（2）（“ “ “ ）	38
第26図	有田遺跡採集の石斧（松本実測・製図）	38
第27図	城ノ原出土の丹塗磨研臺実測図（下条信行実測、橋口製図）	39
第28図	有田甕棺遺跡略図（森貞次郎作成）	40
第29図	有田8号甕棺実測図（森実測、橋口製図）	40
第30図	有田2号甕棺実測図（“ “ “ ）	40
第31図	有田甕棺遺跡出土の銅戈実測図（森実測、松本製図）	40
第32図	飯倉出土の銅劍および甕棺実測図（森実測、橋口製図）	41
第33図	白塔出土の人面銅戈実測図および底部拓影（橋口実測・製図）	42
第34図	五島山古墳出土の鏡拓影	43
第35図	同上 銅鏡実測図	43
第36図	重留箱式石棺および盲玉実測図（森実測、橋口製図）	44
第37図	同上 山土の鳥文鏡拓影	45
第38図	野方発見の珠文鏡拓影	45
第39図	羽根戸出土の装飾付器台と砾実測図（小田実測・製図）	46
第40図	城ノ原廃寺塔心礎実測図および軒先瓦一組拓影 （下条・徳永・藤口実測、佐田製図）	47
第41図	有田丘陵の遺跡分布図（森作成、佐田製図）	48
第42図	早良平野を中心とする遺跡分布図（森作成、塙屋製図）	51

（航空写真は朝日新聞社撮影）

## 第1章 調査の概要

有田古代集落遺跡は福岡市の西南、早良平野のほぼ中央部に位置する。早良平野は東・南・西の三方を山丘にかこまれ、その中央部を貫流する室見川の解引によって形成された冲積平野である。遺跡は室見川と金屑川にはさまれた洪積層からなる独立低位丘陵上にある。この台地は南北1km、幅0.7kmの細長いもので、海拔15m、水田よりの比高8mを示している。地籍は福岡市大字有田字六反畠、下後、千道宗である。現在は区画整理が完了し、現状はいちじるしく変更され畠地となっている。

昭和40年の秋に、有田部落の土地区画整理組合による宅地造成工事が施行され、多くの遺跡や遺物が発見された。その後昭和41年1月20日の予備調査をへて、42年2月20日から3月11日までの20日間にわたって第1次発掘調査をおこなった。この調査の概要についてはすでに報告しているが、その大要を述べると第1次調査は8ヶ所、延500m<sup>2</sup>の試掘溝を中心に行ない、13, 18, 25, 27, 29, 31街区で遺構が発見され、弥生前期のV字状溝1本、古墳時代前期の堅穴二棟、古墳時代後期の堅穴一棟、奈良時代の堅穴一棟などを発掘調査した。

今回の第2次発掘調査の主要な課題は、第一次調査の継続としての、①弥生前期初頭の遺構、特に未だ解明されていない家屋及び集落の構造の究明 ②古墳時代の住居址の構造・形態の変遷と土師器の編年。の2点と、あらたに ③奈良時代における製鉄工房址の構造を加えた3点である。調査は昨年と同じく昭和43年2月20日から3月11日までの20日間にわたり、発掘個所7ヶ所(29, 31, 27, 18, 17, 16, 13街区)延面積900m<sup>2</sup>におよんだ。その結果、弥生前期のV字状溝1本、弥生後期U字状溝1本、古墳時代前期の堅穴住居四棟、古墳時代前期の溝2本、奈良時代炉址3個、奈良時代掘立住穴1個、平安時代溝1本、中世の溝1本を検出した。

まず29街区において、第1次調査の溝に連続する夜臼式と板付T式土器を共伴するV字状溝を検出した。この溝の方向は弧状をなして27街区にのび、その内側は現在の有田部落側である。発見遺物は第1次調査と同様で、弥生前期初頭の遺構である。13, 27, 18, 17から発見された4棟の堅穴住居址はいづれも古墳時代前期、五領式から和泉式の土師器を出土している。これらの住居址はいづれも壁に、並行してベッド状造構をもっており、この地域における普遍的な住居設計と考えられる。31街区において上記の住居址とはほぼ同時期のV字状溝が検出され溝中より五領式終末の土師器が多量に発見された。第1次調査において奈良時代の製鉄工房址として確認された13街区堅穴は、今回種々な事情で残余の部分の発掘はできなかった。しかしながらその隣接の西側地域を調査した結果、奈良時代の炉址と考えられるピットより鉄錆を発見した。他に奈良時代の遺構としては、27街区から掘立住穴1個を発見し、第1次調査の2個と共に、この地域に大きな建造物の存在したことを推定させる。最後に31街区北西において中世の溝1本が認められた。

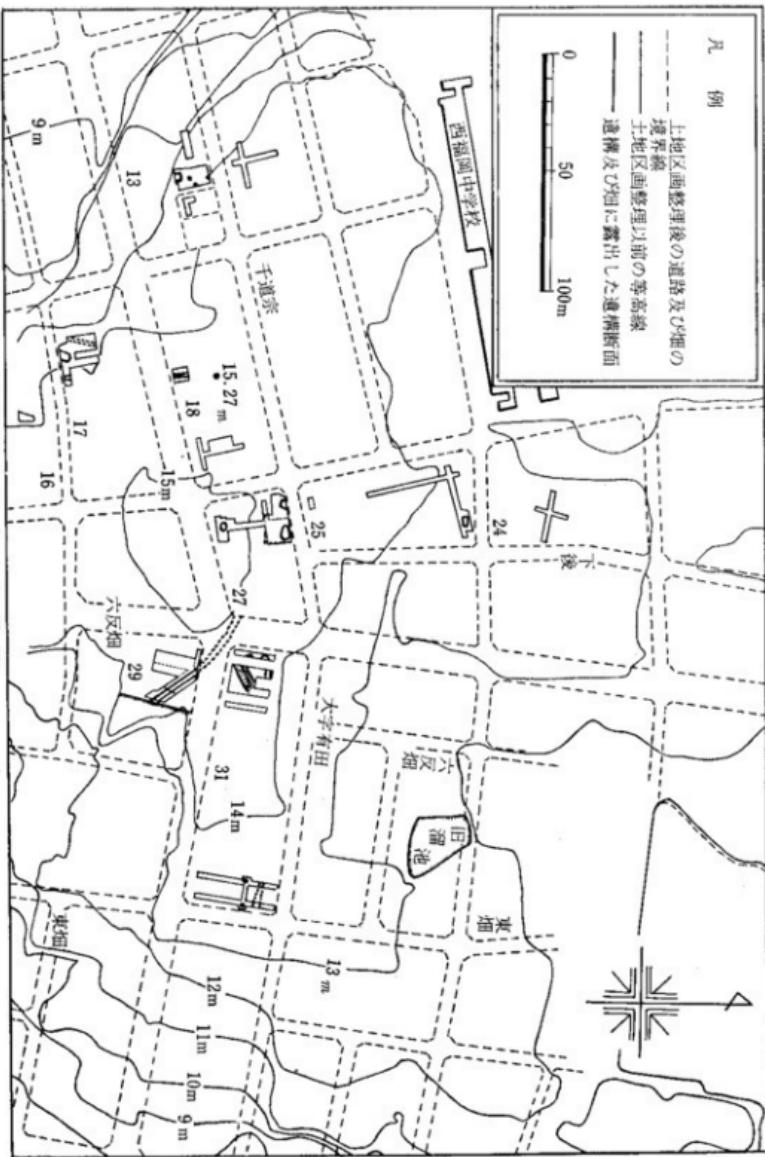
凡例

上地区画整理後の道路及び他の  
境界線

土地区画整理以前の等高線

遺構及び古墳に露出した遺構断面

0 50 100m



第1図 右田 遺跡 概要図

これら発掘調査とともに、われわれは有田遺跡をとりまく早良平野のゼネラル・サーベイをおこない、本遺跡をとりまく歴史的環境を追究した。

なお早良平野の歴史地理的環境および第一次調査については、福岡市教育委員会『有田古代遺跡調査概報』1967を参照されたい。（亀井明徳）

### 有田 遺 跡 調 査 関 係 者

#### 調 査 員

考古学部門 織山猛 岡崎敬 森貞次郎（調査主任） 小田富士雄（現地主任） 下条信行  
亀井明徳 佐田茂 橋口達也 塩屋勝利 上田和子 高倉洋彰 藤口健二 真野和夫  
徳永博行 黒野肇 西田京子 松本肇 貞方敏

地理学部門 日野尚志（有明工専）

自然科学部門 永松土巳 石川文雄（九大農学部） 坂田武彦（九大工学部）

調査補助員 石川隆生 枝和久 船越広海 江川和広 板井康弘 富田真子

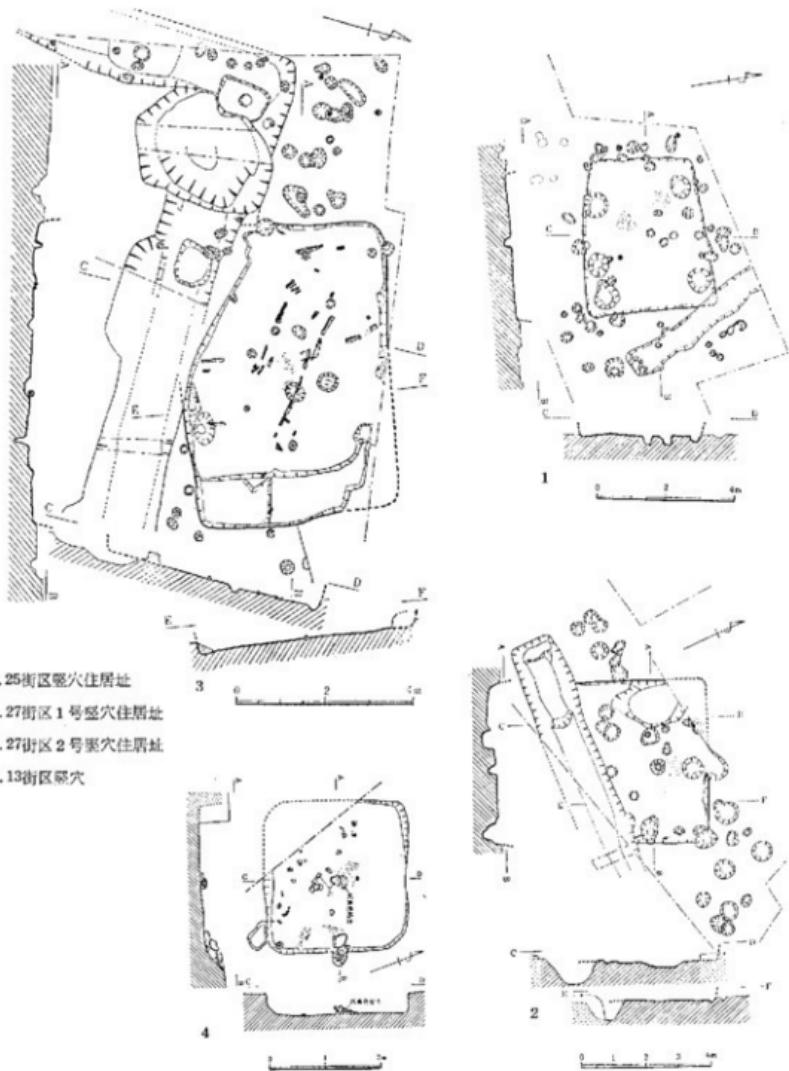
地元調査援助者 板口守 松尾増雄 板口武登 板口正敏 平川タニ子 小林哲英 毛利伊左雄  
松尾政雄 板口武雄 倉光ミサヲ

協力団体 福岡県教育委員会 有田土地区画整理組合 朝日新聞社

福岡市教育委員会 長東正之 阿部哲郎 青木崇 楠口辰美 清水義彦 花田薰 野上淳次 石  
橋博 木下悦子 荒川芳弘



積 雪 の 中 で の 調 査



第2図 第1次調査発見の堅穴

## 第2章 調査の記録

### I 29街区溝状遺構（第3図）

この遺構は福岡市板付遺跡に見られるような、夜臼式土器と板付I式土器を共伴する弥生文化初頭の溝である。41年度調査で約6mが発掘されたが、今回その北西側延長に幅4m、長さ13.6mのトレンチを設定して20cm単位で掘り下げた。また前期の遺構を検出するために、29街区北側道路に直角に幅4m、長さ19mの南北トレンチを設定した。

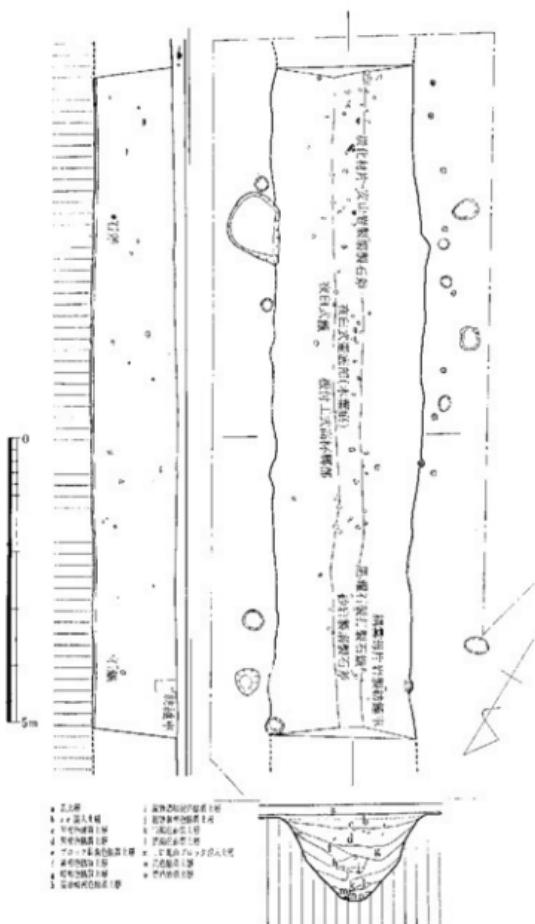
溝は後世の遺構が一部かかっているが、長さ約12m、幅2.3~2.6m、深さ約1.5mであり、断面はV字状をなし、溝底は北西端より南東端へ現地形に沿って、約5cm傾斜している。溝の西側で、溝に沿って直径10cm内外の小ピットが、前年度の4個に加えて、今年度発掘の東南端に9個検出された。この間推定される小ピットは耕作時に削除されたり、検出が困難な状態であったので発見されなかった。これらの小ピットは廻流している可能性があり、溝に付設の柵状遺構とも考えられるが、断定しがたい。この溝の延長は試掘溝によって、29街区北半より、東南から西北方向にゆるやかな弧を描きながら、27街区東側まで約60mにわたって確認された。原地形で15mの等高線は、溝の西南側（27街区南半、28街区北半、17街区北東隅）を走っている。溝のプラン及び原地形よりして、集落址が現在の有田部落の一部と重複していることが考えられる。しかし上記の南北トレンチでは、後世の柱穴を確認ただけである。

遺物の出土状態は、地表下40~50cmには、夜臼式・板付I式土器を主体に、板付II式・弥生中～後期の土器・土師器・須恵器が混入しているが、その下層より溝底までは、夜臼式と板付I式の共伴層である。垂直分布状態は、前年度分に比して、溝底上50cmより下層にも多数散布している。遺物はすべて破片であり、復元可能なものとしては夜臼式壺形土器（第4図26）と壺形土器（20）の2点がある。

〔出土遺物〕（第4図）石器には肩雲母片岩製紡錘車（27）、砂岩製磨石斧（28）、角閃石安山岩製磨石斧（29）その他刃方のわずかな黒曜石製打製石器がある。石斧は2本とも断面は中期の梢円形に近いものと較べてやや扁平で、刃が片方に寄っている。石質も打撃に強くなく、伴出遺物より考えるといずれも弥生文化初頭のものとしてさしつかえない。纺錘車、石器も同様である。

土器は（1~9、11~17、20、26）が夜臼式。（10、13、18、19、21~23、25）は板付I式。

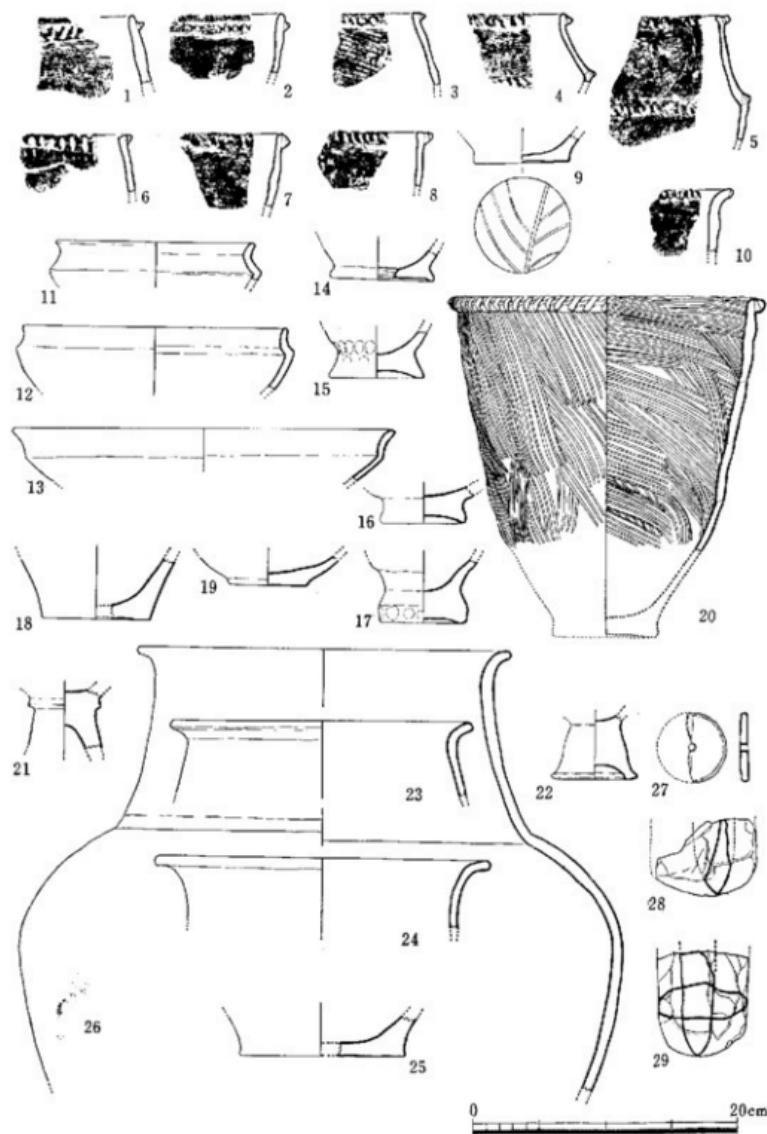
（24）は板付II式。（1~8、10、20、24、25）は壺形土器である。完形に近い（20）は、内外に縦あるいは、斜行の条痕を有し、前回出土の壺形土器（概報21図13）は口縁がやや外反し、板付I式に近い形態を有したが、これは口縁が直立している。（11、12）は夜臼式の浅鉢、あるいは高杯であり、（13、21、22）は板付I式高杯の口縁部と脚部である。（9）は木葉痕のある壺形土器の底部である。（14）は瓶で焼成後の穿孔である。（23、26）は壺形土器で、（26）は高さ約56cmの大形品で、佐賀県五反田第4号支石墓の下室に使用された壺と類似の形態を有し、夜臼式壺形土器



第3図 29街区溝状遺構実測図

の最終末の形態と考えられる。この往削り底の高台を持つ夜臼式浅鉢の底部がある。

以上本遺跡は弥生文化初頭の溝であり、築落址側に樋状遺構を伴なっていた可能性を残している。なお石器の材質については、九大理学部地質学教室に依頼した。（橋口達也・松木肇・藤口健二）



第4図 29街区出土遺物実測図

## II 13街区堅穴住居址および奈良時代炉址（第5図）

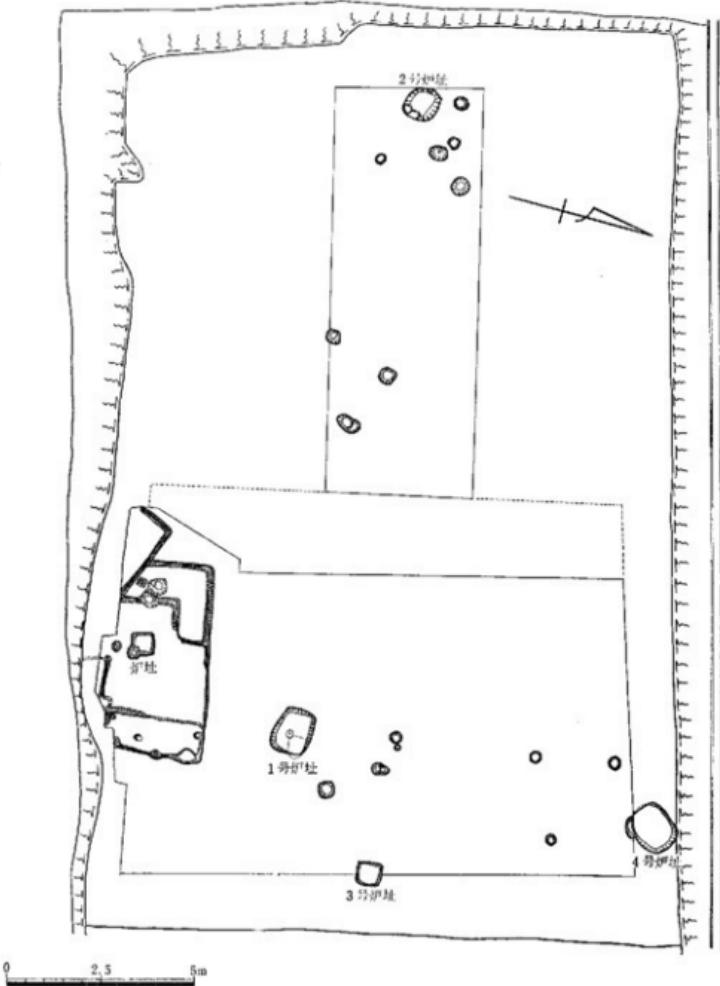
(a) 堅穴住居址（第6図） 1967年度に調査した奈良時代工房址の西側に幅2m長さ12.5mのトレンチを南北に並列して5本設定した。東より第1～第5とし、第5トレンチを除き表土を全面排除した結果、南側に古式土師器を伴なう1号堅穴住居址を検出した。この住居址の南側は、宅地造成による地下げが行なわれ破壊されていた。また、南西部は2号堅穴住居址と重複する。1号堅穴住居址は東西の長さ5.3m、南北は現在3.3mで、掘りこみは地山面から34cmである。区画整理の時に上部は削平されている。堅穴住居址内には東壁より南壁2.2mにわたりL字形のベッド状遺構が設けられ、西壁より北壁1.9mの間にも同様のベッド状遺構があり、床面より16cm高く造り出され幅は70cmから90cmである。ベッド状遺構の周囲には幅18cm、深さ8cmの溝が走っている。堅穴住居址のほぼ中央部に一辺30cm、深さ床面より8cmの方形炉があり、炭や灰の出土は見なかったが火熱により赤変していた。柱穴は堅穴住居址内に於て14個みられたが、この住居址の主柱穴と考えられるものは東壁沿いの南のもの、炉の南側及びベッド状遺構上の中央部南側のものが考えられ、東西棟の初妻家風が推定される。

〔出土遺物〕（第8図） 住居址内よりの遺物の出土量は少く、上層部に於ては夜臼式土器、弥生式土器、奈良時代の須恵器や土師器片が混在して出土した。北壁寄りで床面に接し土師器の底部と甕形土器の胴部破片と円錐状で長径7cm、短径5cm、長さ約18cmの白色粘土塊が2個出土した。甕形土器（1, 2, 3）は口縁部がゆるやかに外反するものと、強く外反するものとが見られ色調褐色ないし黄褐色を呈し胎土に細砂を含有する。（4）は淡黒褐色で外面は刷毛仕上げで弥生時代後期の色彩が強い。図示しなかったが床面に接して出土した甕形土器の胴部破片は色調淡褐色を呈し、外面の一端に叩き目が見られ縁が附着している。（5）は甕形土器の底部で丸底、色調褐色を呈し焼成良好である。（6）は弥生式土器底部で流れ込み、（7）は鉢形土器の脚台で色調は褐色を呈し内面に横に刷毛目が見られる。この種の土器は大分県東国東部安國寺遺跡や大分県佐伯市白湯遺跡、熊本県玉名郡天水町野辺田遺跡など土師器に移る直前の遺跡より出土している。堅穴住居址内にベッド状遺構を有する例は福岡市赤永原遺跡や播磨大中遺跡などがあり、弥生時代末期に比定されている。この堅穴住居址もベッド状遺構を有し、しかも土器は土師器及び土師器直前の弥生式土器をまじえている。

2号堅穴住居址は、1号堅穴住居址の南西部を切断して造られているが、地下げにより破壊され北隅のみ現存する。地山よりの掘りこみは12cmで西壁沿いに幅16cm、深さ8cmの溝が走る。遺物は土師器の絆片のみであったが上層には奈良時代の須恵器片も含まれていた。

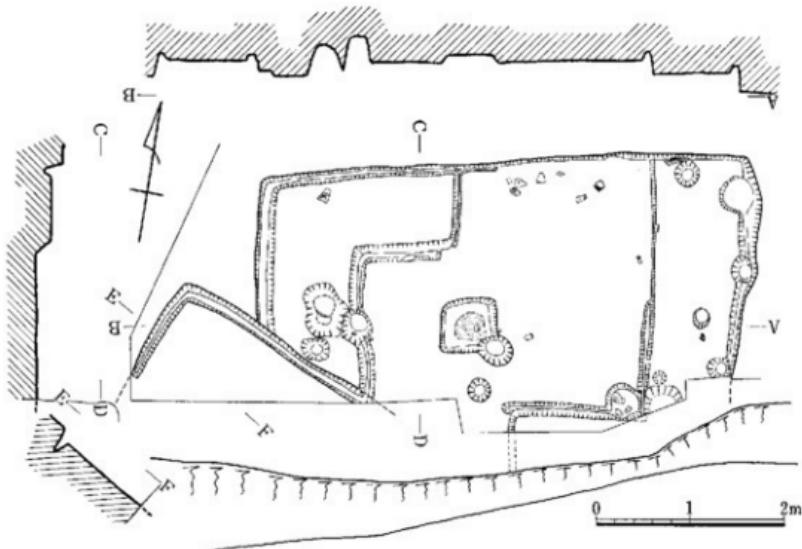
(b) 奈良時代炉址（第7図） 1号堅穴住居址の北1.8mの箇所に1号炉址を、第1トレンチの中央部で東端に3号炉址を検出し、第5トレンチのほぼ中央部より幅4m、長さ11mで設定した第6トレンチの西端で2号炉址を検出した。

1号炉址は長径1.28m、短径0.92mの両丸長方形プランで、深さは地山面より45cmである。

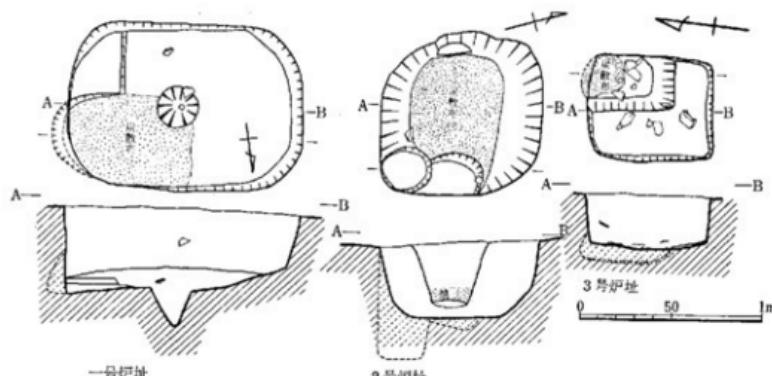


第5図 13街区発掘区検索範囲

2号炉址は一辺90cmの開丸方形で深さ地山面より約40cm、壁は傾斜をもっている。3号炉址は長径70cm、短径58cm、深さ地山面より30cmの長方形プランのものである。これらの炉址はさ



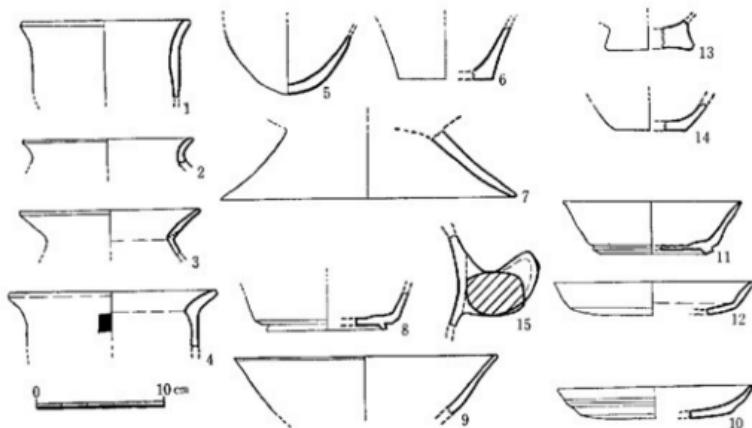
第6図 13街区堅穴住居跡実測図



第7図 13街区炉址実測図

らに床及び壁の一部を掘りくぼめこの部分には炭が多量に散布していた。

2号、3号炉址の掘りくぼめた壁面は火熱を受けて赤焼している。1号炉址の中央部の打込柱穴



第8図 13街区出土遺物実測図

や2号炉址内の柱穴は炉が廢棄された後のものである。2号炉址の周辺には5個の柱穴があり、打込式柱穴とそのすぐ北にある浅い柱穴を除く3個の柱穴は径40cm前後、深さは地山面より50cmから60cm以上に達し、この炉址の主柱穴と考えられる。炉址の南側は凹状では崖となっていた。埴輪様式は平地住居と推定される。

**〔出土遺物〕**（第8図） 炉址内よりの出土量は少く、(8), (9)は1号炉址、(10)は2号炉址、(11), (12)は3号炉址出土である。(8), (11)の須恵器の高台のある杯は鼠色の焼成堅緻なもの、(12)の杯は淡鼠色で焼成不良である。(9)の高杯及び(10)の杯は上部基で焼成良好である。(15)の取手は柱穴内より出土したもので絹糸を多く含有する。他に1号炉址、3号炉址、2号炉周辺の柱穴内より鐵鋸が若干出土した。これらの遺物は八世紀頃の特徴を有するので、此址は奈良時代のものであろう。

その外に第1トレンチの北端で長径1.27m、短径0.95m、深さ地山面より約80cmの隅丸長方形の堅穴を検出した。遺物は上層に夜臼式土器や弥生式土器を含み、下層では殆んど遺物を含まない。床面に密着していた弥生式中期の土器底部は調査中壊棄にあった。

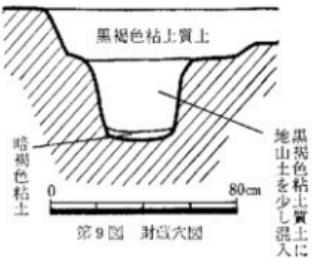
この堅穴のプランは1号炉址と似ているが、構造が若干異なり、炭や焼土面もなく出土した土器より弥生中期のものと考えられる。（黒野肇・上田和子）

### III 27街区堅穴住居址および奈良時代掘立柱穴（第10図）

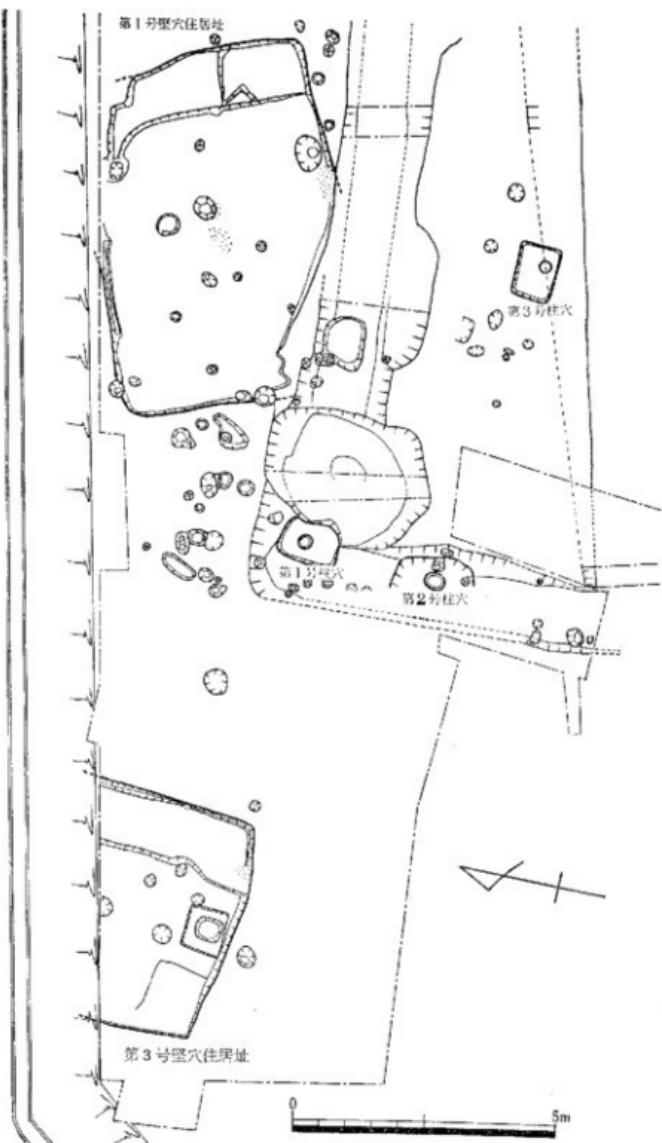
(a) 第3号堅穴住居址（第9・11図） 27街区北西隅より古墳時代前期の堅穴住居址一棟を発見した。第1次調査においてこの街区で2棟の堅穴住居址が発掘されているので、これを第3号堅穴住居址とする。北側を道路によって切断されているためその全形はつかめないが、東西4.1m、南北3.2m以上である。壁は垂直に近い傾斜をもち、壁の現存高は15cmであるが、西側の壁は旧道によって削平されごくわずかを残すのみである。東辺から南辺の半分にかけての壁沿いに幅10cm、深さ10cmの側溝が走っているが、住居址全体を断続していない。東辺および西辺にそれぞれベッド状造構が設けられている。東辺のものは幅1.1m、床面よりの高さ12cmである。西辺のものは旧道と排水管工事によってその北半を破壊され原形をわずかにとどめるにすぎない。これらのベッド状造構はいずれも当初から掘り成されたものである。ベッド状造構にはさまれ、東西辺のほぼ中央に大きなピットが認められた。第9、11図に示すように、東西0.8～1m、南北0.8mのほぼ方形のプランをした掘りこみを床面から切りこみ、その中央に0.5mの方形のさらに深いピットを掘りこんでいる。このピットには住居址埋没土と同質の黒褐色粘土と地山の土の混入したものが堆積し、底部3cmは暗褐色粘土が張られていた。従ってこのピットは住居址に付属する一種の貯蔵穴と考えられる。火熱によって赤変して焼きしまった粘土ブロックは4ヶ所から発見された。貯蔵穴状ピットの北側にも焼土が顕著に認められ、これに接する円形ピットは炉址と考えられる。従って炉は住居の東西辺のほぼ中央にあるが、南壁に通したところに設置されている。他にピットは堅穴住居址内外から5個みとめられたが、中央部北端の半軸のものは浅い回状で柱穴とは言いがたい。南壁外にややはなれてあるピットは、東西辺のほぼ中央にあたり棟持柱穴と考えられる。

土器はほぼ全面に散布するが、いづれも小さな破片である。がの北に接して砂岩質の扁平な石が1個発見された。

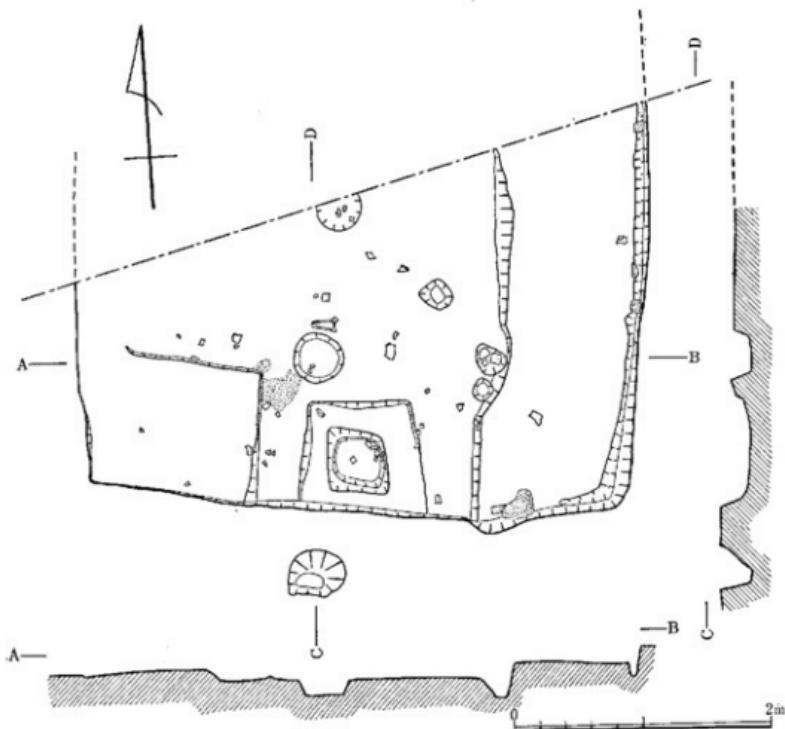
〔出土遺物〕（第13図1～4）（1）はやや内湾しながら外反する小形丸底壺である。口縁に最大径をもつが、口頭部は短い。精良な胎土を用いヘラ磨きがなされている。（2、3）は壺形土器でいづれも「く」の字状に外反する短い口縁をもつていて、焼成悪く表面の剥落がはなはだしいが、（3）には横状に細い刷毛目がみられる。（4）は複合口縁の壺形土器で外面に縁をもつがやや退化している。砂粒を多く含む胎土で、焼成悪く表面の剥離がはなはだしく整形方法は不明である。これらの土器はいわゆる五輪式土器に比定される。昨年の第1次調査において本住居址の東側7mのところ



第9図 貯蔵穴図



第10図 27街区発掘区域実測図



第11図 27街区第3号墳穴式住居跡復元図

にはほぼ同時期の墳穴式住居址が発見されている。これは長方形プラン ( $6.75 \times 3.75\text{m}$ ) でベッド状遺構をもつ住居址であり、本住居址との類似性が認められ、古墳時代前期の墳穴式住居の一タイプと考えられる。(亀井明徳)

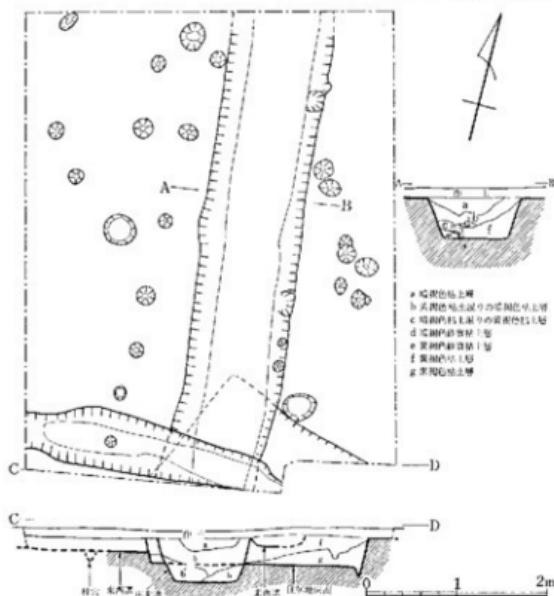
(b) 奈良時代掘立柱穴(第10図) 昨年度の調査において南北方向にならんだ2個の柱穴が発見されていたので、今回は建物の全貌を知るべくトレンチを設定して調査を行なった。その結果、2個の柱穴群に直交して東側に1個の柱穴を確認した。この柱穴は平城宮址をはじめ奈良時代の建物に一般的な掘立柱の形式をとっている。ここでは便宜上北から1号柱穴、2号柱穴、そして今回の調査で新たに発見されたものを3号柱穴と呼ぶことにする。1号柱穴は $110 \times 90\text{cm}$ の掘り方をもち、径 $25\text{cm}$ の柱の抜き跡がある。2号柱穴はその半分を後世の溝によって破壊されているが、ほぼ方 $140\text{cm}$ の掘り方をもち、内部に径 $25\text{cm}$ の柱の抜き跡がある。3号柱穴は方 $100\text{cm}$ 、深さ $75\text{cm}$ で、径 $25\text{cm}$ の柱の抜き跡がある。これらの柱穴群の断面をみれば、まず掘り方を掘り、柱を施て、その周りを粘土でしめていることがわかる。

柱穴相互間の関係をみてみると、1号柱穴と2号柱穴との距離は255cmをはかり、2号柱穴と3号柱穴との距離は615cmをはかる。1号柱穴と2号柱穴との距離を奈良時代に一般的に用いられた単位尺29.7cmで考えると8尺5寸(252cm)に近い数値を示している。この柱間8尺5寸のものを平城宮址の宮街地域の建物から抽出してみると、第1次内裏の北地区の大膳殿、或いは内膳司と考えられる地区的昭和35年度の第4次調査でわかったK・M地区にある東西棟7間×2間の建物(SB 194-A)と、同じ年の第5次調査のI地区にある南北棟4間×2間の建物(SB 136)の桁行中央2間にみられる。2号柱穴と3号柱穴との距離615cmは24尺(約613cm)にはば合致する数値であるけれども柱間24尺という距離は到底考えられないので、その間に柱が1本ないし2木存在するのが妥当だと考える。一般的には2木の柱、つまり柱間3間が24尺で、柱間1間が8尺の場合が考えられるが、今回の調査では、地主側の制約によって確認できなかった。或いは1号柱穴、2号柱穴と3号柱穴とは別の建物を想定することもできるが他に柱穴が確認できなかつたので結論的なことはいえない。しかしながら柱間間の距離から考えて、奈良時代の建築物の造構の一部であることは確実である。(佐川茂)

#### IV 18街区堅穴住居址および溝(第12図)

18街区の南側を東西にはしる道路の切削断面に土器包含層が認められたので、東西4m、南北5mの部分を発掘調査した。その結果、古墳時代初頭の住居址、古墳時代中期の南北溝、平安時代の東西溝、及び柱穴列の4つの時期をことにする造構が重複していることが確認された。

まず住居址は、道路と南北溝によってその大部分を破壊され、わずかに北壁の一部を残すのみで詳細は不明である。現存部より推定すると地山を30cmの深さに掘りこみ、壁はほぼ垂直の傾斜をもつ。實際に上部幅7cm深さ10cmの側溝をめぐらしている。小範囲の発掘のため柱穴、柱跡等の造構は検出できなかった。床面は堅く踏み固められており、床面に密着して土器



第12図 18街区発掘区域実測図

甕口縁部（第13図11）が発見された。この住居は東側からの土砂の流入によって埋没したと考えられるが、その埋没土中より弥生後期の杏形土器（15），甕底部（12），土師器高杯（13・14）の破片が発見された。

この住居址を切って南北方向に溝が伸びている。溝の形状は、上部幅1m，下部幅0.7mで断面凹状を呈する平底の溝である。溝底より5cm上の壁際のピットより小型丸底壺（16）が発見され、その他溝中の埋没土中より土師器、須恵器のごく少量の破片をみた。

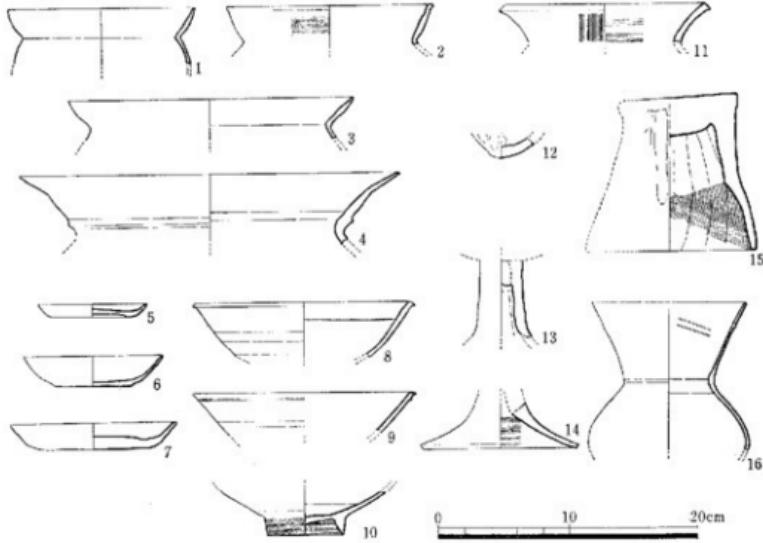
つぎに南北溝に直交して東西方向に浅いU字状を呈する溝が伸びている。現地表面から深さ5cmのところから地山に切りこまれ、南北溝が埋没した後に開削されたものである。溝底に密着して青白磁瓶（8～10）、土師器皿（5～7）、滑石製石錐が共伴して発見された。

柱穴は大小合わせて22に及ぶが、そのうち2個は掘立柱で他はすべて打支柱である。南北溝の西側の柱穴7個は、南北方向にはほぼ一直線上にあることが注意される。この7個のうちで南端のものは東西溝中にうがたれ、この柱穴列は東西溝より後出のものであることを示している。

〔出土遺物〕（第13図11～16）（11）は住居址床面に密着して発見された土師器杏形土器の口縁部である。外反した短い口縁をもつ土器で良質の胎土を用い、外面に継状の刷毛目を施しており赤褐色を呈する。いわゆる五領式の土師器である。

南北溝中より発見の（16）は小形丸底壺で、外反する口頭部と球形胴部をもち、口径と胴部最大幅はほぼ一致する。五領式土器後半のものと考えられる。

東西溝中の土師器皿はいずれも糸切底の痕を明瞭に残すものである。これと共に伴する青白磁は宋代製作の碗である。従ってこの溝は平安時代後半に使用されたと考えられる。以上の所見を



第13図 27, 18街区出土遺物実測図

1～4, 27街区第3号窪穴住居址 5～10, 18街区東西溝 11, 18街区溝穴住居址 12～16, 18街区南北溝（8～10は青白磁、他は土師器）

まとめれば、この18街区の複合遺跡は次のように考えられる。まず古墳時代前期に堅穴式住居がつくられ、これが廃棄埋没した後に南北溝が開削され、さらに平安時代後半になって東西溝があらたに作られた。その後に柱穴列をもつ平地住居が定められたと考えられる。（亀井明徳）

## V 31 街区溝状遺構

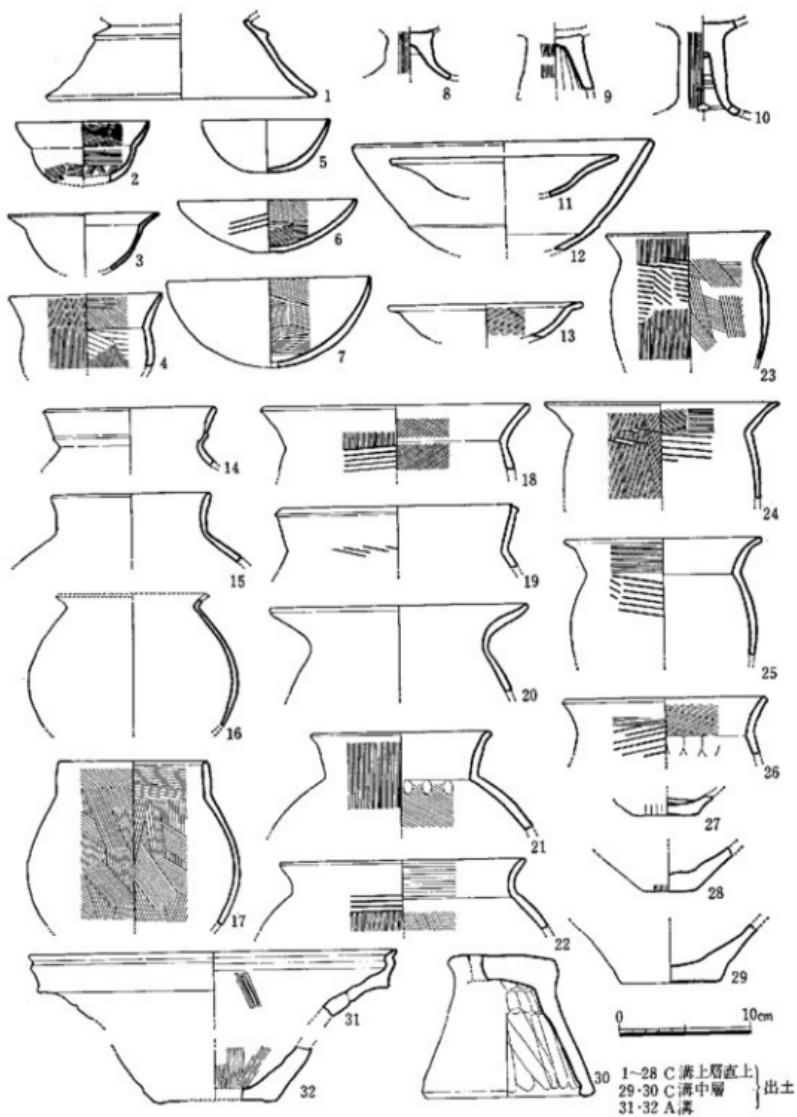
31街区の西端に幅2m、長さ15.3mのトレンチを南北方向に10本設定した。西から順に1~10トレンチと称する。1、4トレンチで二本の溝状遺構、5~7トレンチで一本の溝状遺構を検出した。溝は便宜上A・B・C溝と称する。

(a) A溝・B溝いずれも1トレンチ内に溝の末端部があり、北溝(A溝)は北東、南溝(B溝)は南東の方向へ延びている。A溝は幅4m、深さ1.4mで凹状断面を呈する。B溝は幅1m深さ0.8mでA溝と同じく凹状断面を呈する。而溝とも北方向からの土砂によって埋没したと考えられるが、A溝の埋没土中より備前焼系の擂鉢と中世の平瓦が発見された。

(出土遺物) (第14図31・32) 擂鉢の口縁部(31)は復原径27.6cm、赤褐色の肌で口縁がやや外反しながらほぼ直にたち、内外面とも凹凸を示す。内面沈線は四本の櫛目状工具により放射状に施文されている。口縁下に紐造りの接合部が明瞭に認められ、内外面ともロクロ仕上げが認められる。また底部(32)の製作技法は(31)と類似しているが内面沈線を9本の櫛目状工具で施文している。従ってこれらの擂鉢は室町時代後半のものと考えられる。伴山の平瓦片は繩目すり消しの製作技法をとっている。これらから両溝は15世紀後半を下限とするに中世に使用されたと推定される。(亀井明徳)

(b) C溝 5~7トレンチ内を北東方向に緩かな傾斜で延びており、その両端はさらに続く。溝の上端は現地表下70cmに位置し、上部幅2.8m、底部幅0.5m、深さ1.5mのV字状断面を呈する。層位は大別して三層となる。下層は厚さ約35cmの砂質土層で殆んど遺物を含まない。中層は厚さ約60cmの明褐色と暗褐色の粘質土層の互層からなる。中層上部に弥生後期の土器(29・30)を含む。上層は約50cmの厚さの褐色粘質土層で土師器を含む。その後東南方向からの土砂によって溝は完全に埋没したようである。この溝上層直上の堆積土中の一ヶ所に大量の土師器が約30cmの厚さで密集している。同一個体が15cmの高差をもって発見された例もあり、土師器群自体は一時期の流入と考えられる。溝構築の時期は下層出土の土器が細片のため定かではないが、弥生後期末ないしそれをわざかに遡る頃と思われる。

(出土遺物) (第14図) 溝上層直上の土師器群には甕、壺、高杯、鉢、器台等の出土を見る。全体的に明るい色調のものが多く、胎土には全て細沙を含み、焼成は良くない。菱形土器(18~26)はその殆どに叩きが見られ、その上を刷毛で調整している。叩きは頭部付近だけのものから底部付近に及ぶものまである。形的には胴部の最大径が口径よりも大きなものとその逆のもの、口縁部の屈曲の強いものと直立に近いもの等の差異が見られる。しかし口縁部は全体的に外反し、その中央部に比して口縁部両端が僅かに肥厚するという特徴をもつ。菱形土器(14~17)は叩きが認められない。複合口縁、ほぼ直立する口縁、「く」の字形に屈曲する口縁の三通りの口縁がある。甕・壺の底部は平底例(27・28)もあるがその大半は丸底であったと推定される。高杯形土



第14图 31街区出土遗物实测图

器（8～13）は杯部の浅いもの（11・13）と深いもの（12），脚部の短いもの（8）と長いもの（9・10）の夫々二種が認められる。脚の柱状部は確かに膨みを有している。内面は箆で整形している。（12）では接合部に凹凸を設け差し合させる手法を用いている。鉢形土器（2～7）は口縁部が外反するもの（2～4）と外反せずにそのまま延びていくもの（5～7）がある。（6）には僅かに叩きが見られ、痕跡的な平底を有している。器台（1）は五領遺跡等に類例を見るが、九州では類例が少ない。口径は復原径約23cmに及ぶ大形のもので、残存部はその下半部に当り、内面の荒削りは非常に粗雑である。焼成は堅板である。

以上の所見からC溝上層直上の上部器はいわゆる五領式終末墳に位置すると云えよう。

（高倉洋彰）

## VI 17街区豊穴住居址および溝（第15図）

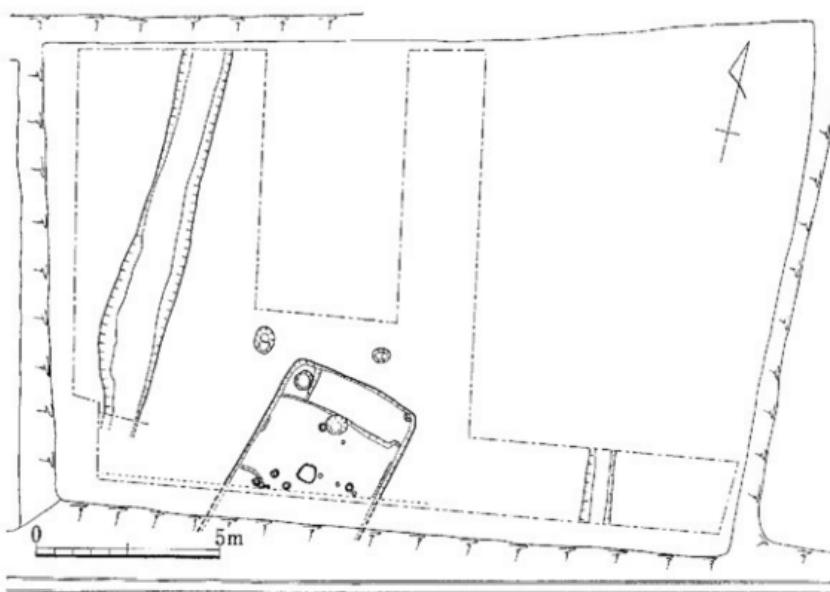
（a） 豊穴住居址（第16図）南北に幅2m、長さ12mのトレンチを3本と東西に幅2m、長さ17mのトレンチを入れる。その結果、東西トレンチ内にて、住居址の北半部を発見した。

住居址は主軸の方向をS-17°-Eにとり南半分を道路によって切られており全貌は知るよしもないが、短辺3.5m、長辺4mを計る。南端は道路によってカットされた崖面にセクションが残っていて、そこにもまだ確認できるので5.7mまでのびていることは明確である。つまり現存長短辺3.5m、長辺5.7mで住居址の南辺はまだ伸びていることになる。このことから南北に長い主軸の方向をS-17°-Eとする長方形プランの住居址であることがわかる。

住居址は北壁に接して幅1m床面より20cm高いベッド状造構と、南側に西壁に接して幅82cm、床面よりの高さ17cmで、長さはカットされているために不明なベッド状造構をもち、中央に径50cmの不整形ながれをもつ。ビットは北壁に接したベッド状造構に3個、もう一方のベッド状造構に1個、床面に11個の計15個を数える。また住居址外で直接住居址と関係するものかどうか不明であるけれども、北壁の北76cmのところで、ほぼ主軸の延長上に長径48cm、短辺30cm、深さ22cmの梢円形のビットが確認された。北ベッド状造構上の西にあるビットは径48cm、深さ70cmを測り、内部から土器の破片が數点出土したが、貯蔵穴かと思われる。

この住居址は東壁と西壁に部分的に溝がみとめられる。また貯蔵穴かと思われる北西隅のビットの上面を始め、5ヶ所に床面の焼けた痕跡、炭の散布したところがみとめられた。

北側ベッド状造構についてのべれば、このベッド状造構は始め幅1m、長さ2.64mの大きさに作られており、ベッド状造構と西壁との間には、貯蔵穴かと考えられるビットがあったものが、次には、ビットを廃棄してベッド状造構を延長している。このことは住居址の床面とベッド状造構の二次的に延長された部分との土質の違い、また一次的なベッド状造構とも違うことからうかがわれる。これは弥生後期から古墳時代前期にかけてみられるベッド状造構をもった住居址について、階級関係の反映、仕事場と寝所の分離を示すものであるとか言われているが、この問題とも関連してくる。なおこの北側ベッド状造構は床面に盛土して作ったものである。



第15図 17街区発掘区域実測図

〔出土遺物〕(第17図)住居址に伴なう土器としては、壺、壺、高杯、鉢などが出土している。

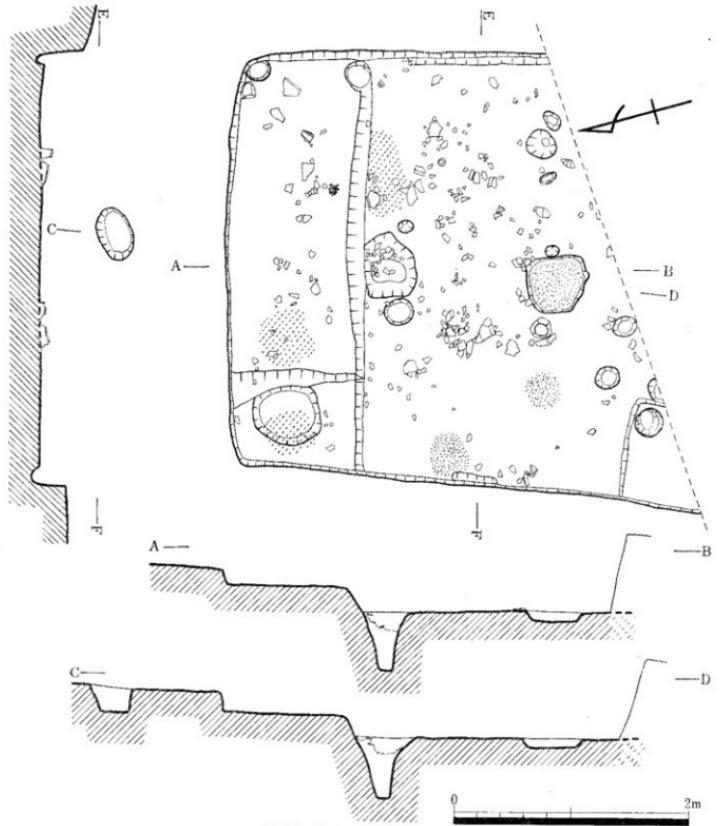
甕形土器(1・2・3・4・5)は、わずかに外反する「く」の字形の口縁部をもち、口縁上端に狭い面をつくるものと、まるくなるものとがある。断面をみると、口縁部のはば中位でわずかに肥厚している。胴部のわかるものは2例の出土例をみると、やや肩の張った胴部の最大径がやや上方になる球形の体部を有し、底部はわずかにとがり気味である。

外面は口縁部、胴部とも刷毛で仕上げる。刷毛目の方向は上→下へついているが、すこし方向の異なるものもある。(4)の土器は叩きによって形をととのえ、その後に胴部下半部を刷毛で成形しているために、丁度胴部最大径を境にして上半部には横方向の叩き目が残り、下半部は上下の方向に刷毛目がみられる。口縁部、頸部接合部周辺は横なでで仕上げている。内面は箒で削るが、その上を刷毛でなでている。(2・3)では粗密両様の刷毛を使用している。

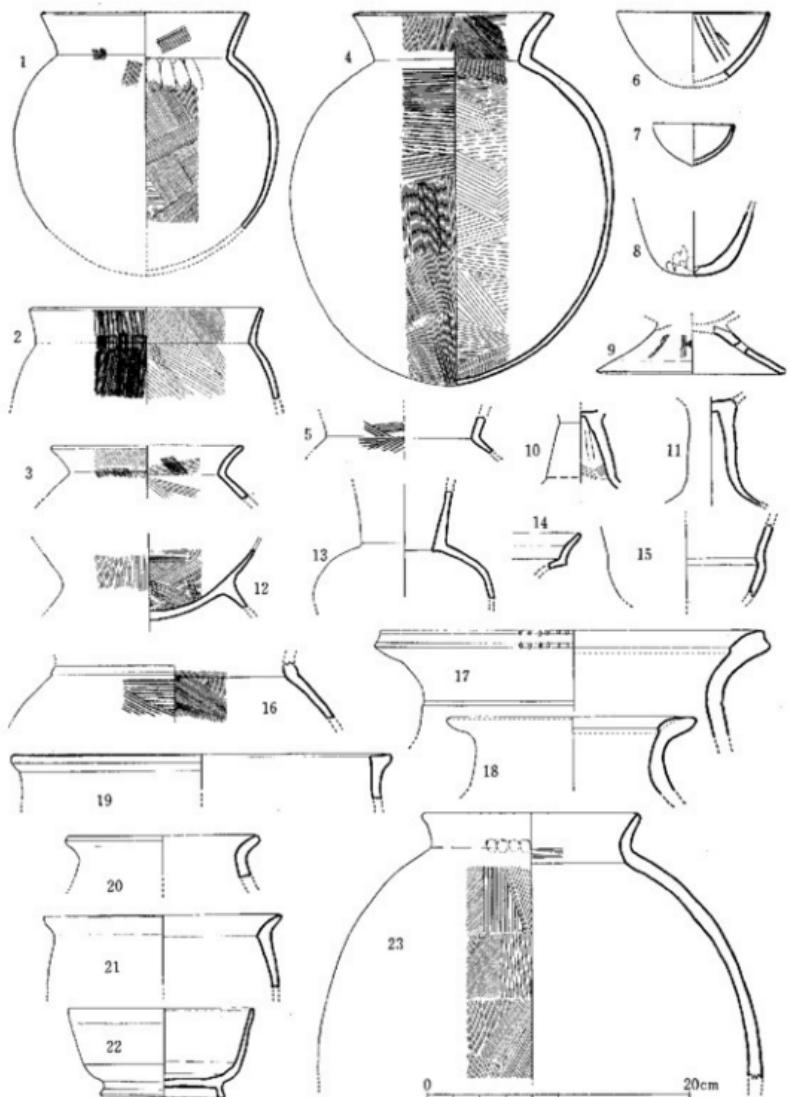
底部は確認できるものは1点の出土を見るのみだが、全て丸底であろうと思われる。

全体に器底も余り厚くなく、色は暗赤褐色ないし黄褐色を呈し、胎土は全て細砂を含んでおり。壺形土器(13・14・16)は出土がすくなく、わずかに3点のみがみられる。底部がまるく、頸がまっすぐに立つものと二重口縁のものとがある。

高杯(9・10・11)は脚部が出土しているが、脚の短かいものと長いものの2種がみられ、脚部のわずかにふくれるものもある。



第16圖 17街区整火住居址實測圖



第17图 17街区出土遗物实测图

鉢（6・7・8）は口縁部が外反するものと、底部から抜がったままのものと2種類出土している。

以上からみて、この住居址の年代を考えると、甕において、口縁部がわずかに外反し、叩き目を有するものがあることや、胴部最大径がやや上半に位置し、底部がわずかではあるが、とがり気味であること、高杯の脚部がわずかに彫れており、また、鉢に2種類あり、いわゆる古式土師の様式ともなっている小型の土器群がみられることよりして、和泉式も古い時期といえよう。

住居址内の東北部に集中的に弥生式土器の出土がみられるが、床面より高い地点から出るところから東北方向からの流れ込みと考えることができる。夜臼式の甕の口縁部、板付I式、II式（17・18）の底の破片、金海式の甕棺の破片などが出土している。

(b) 溝（第15図）住居址の西側約3mのところに南北方向に走っている溝は最大幅1.7m、深さ60cmのU字形の断面を呈している。今回の調査において長さ10.40mを調査したが、南側、北側ともまだ続いている。調査された部分だけについていえば、南に行くにつれて次第にせまくなっている。溝の方向は、北より南の方が15cm深くなっている。北から南へ流れていたものと考えられる。溝内の遺物については後述するけれども、溝の底から弥生後期の甕の口縁部（21）が出土したことから、この溝の時期もほぼその頃に考えることができるだろう。以上の状況から考えて、住居址とは直接の関係はなかったものといえる。

〔出土遺物〕（第17図）弥生式土器、土師器、須恵器が出土している。（19・20・21）は弥生式土器で（19）は甕の口縁部、（20）は甕の口縁部で前期のものである。（21）は甕の口縁だが後期のものであり、溝の底から出土した。（23）は土師器で、外反した短かい口縁部をもち、外面胴部に刷毛目、内面は口縁部にわずかではあるが横方向の刷毛目が認められる。脚部内面は全面笠で削っており、球形の体部をもつ。（22）は須恵器で高台がつき、杯部が深いところから奈良期のものといえる。また糸切り底のものも出土している。

（佐田茂・真野和夫・徳永博行）

## 第3章 有田遺跡をめぐる諸問題

### I 有田遺跡の土師器とその性格（第18図）

前後二回の発掘調査を通じて有田遺跡から発見された主体をなすものは古式土師器を伴う堅穴住居址であった。特に第二回の調査では17街区の堅穴と31街区の溝上でまとまつた土師器資料を発掘した。

最近、各地で弥生土器から土師器への転換期の研究がすすめられているが、北九州のこの時期に関する研究はややおくれている現状である。したがって有田遺跡の土師器を編年的に位置づけるためにも、また今後の研究を基礎づけるためにも一応の物指をつくる必要がある。これまでにも弥生土器から古式土師器にわたる時期の集落の調査には筑紫郡春日町竹ヶ本<sup>①</sup>、福岡市弥永原<sup>②</sup>などの重要な資料を含む遺跡があり、その概要も公刊されているが、編年的な立場からまとめられるには至らなかった。

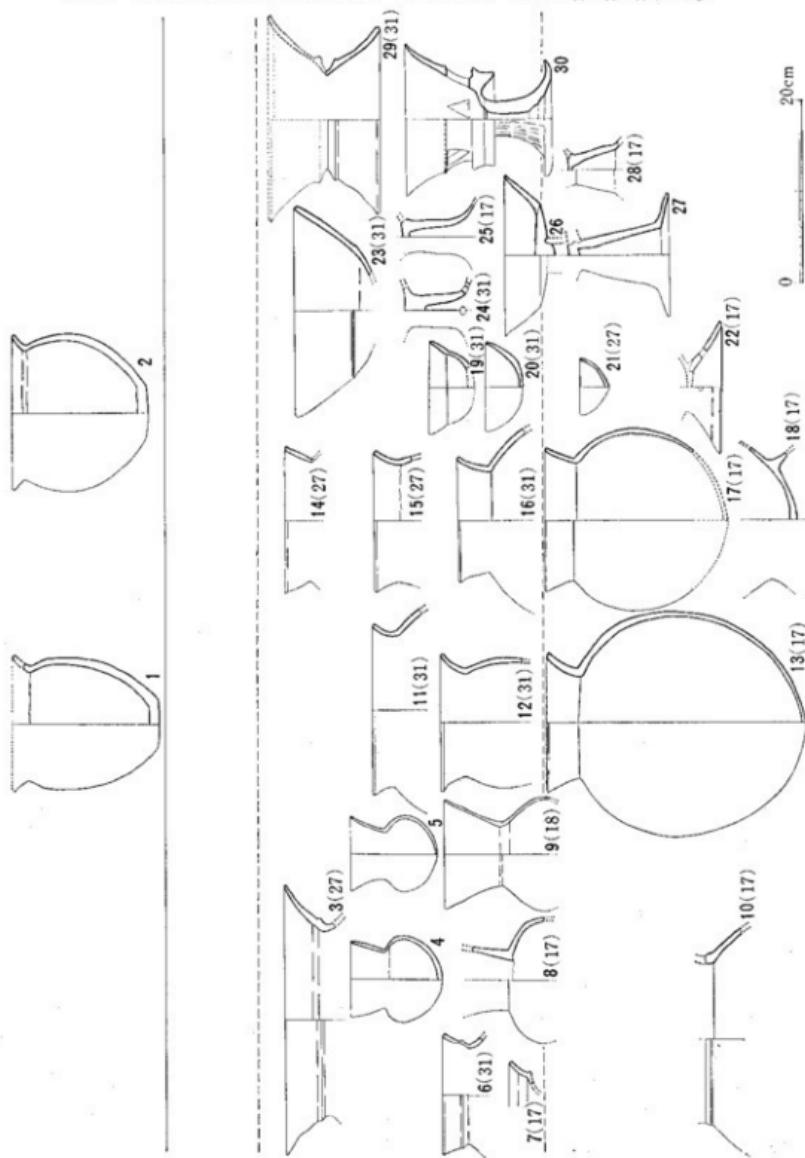
有田遺跡の土師器は各種器形を含む点でまとまつた17街区住居址と31街区溝の資料を基準にしその他の住居址資料を援用し、さらに竹ヶ本、弥永原資料を補う方法で整理した。これまでの資料を通じて壺・壺・甕・鉢・高杯・器台の六種類の形態をあげることができる。

31街区溝の土師器はいわゆる二重口縁の系譜をひきながらその退化したとみられる壺（3）、小形丸底壺のような形態をとりながらやや大形になり長頸の傾向あるもの（8・9）、「く」字形に外反する短い頸をもつ球形胴で丸底或はそれに近い壺（11・12・14～16）、小形丸底の鉢、脚部に弥生時代の伝統をこすが坏部に段を有して上半部の延びが著しい高杯（23～25）、上下は広く中央部でしまって段を設ける特殊な器台（29）などの組みあわせである。巻きあげ手法による器台の内面は鋸削りが加えられ、刷毛目や研磨、撫でなどで器壁をうすく仕上げているが、特に菱形では表面に叩き目を加え、さらに口頭部と下脚部に刷毛目調査を施して仕上げる。頭部はゆるく外反するもの（11・12）と、ほぼ直線的な立上りをとるもの（15・16）の二種がある。また鉢形にも口縁部が外反するもの（19）と半球形丸底（20）の二種がある。

17街区の土師器は口縁部を欠いているがやや厚手大形の壺（10）、球形胴丸底の壺（13・17）、尖底鉢（21）、坏と脚間に棱を設けて古式土師器特有の形成をとる高杯（26～28）などが組みあっている。特に菱形には31街区のものと共通する点が多く認められる。しかし短かくて幅の大きく開いた脚台付の甕（18）、鉢（22）は31街区の資料にはみられなかったものである。

以上二地点の資料を対照してみると共通したところが多いが、31街区にあって17街区にないものとしては小形丸底壺系統のものや特殊器台がある。また壺形は口縁部の比較ができないが、発見された資料からみて17街区の方は二重口縁を欠いている公算が大きい。このような点からみて両者共通するところもあるが31街区溝資料の組みあわせの方がやや古い様相をもっていると考えられる。しかし整形技法において甕に叩き目技法が行われていることや脚台付の甕、鉢がみられ

第18図 土器器形図目録 (□内は施区ナンバー 1・2 氷原、4・5・26・27・30 竹木本)



るなど弥生後～末期の土器に新しく出現したものの継承されていることも見のがせないところである。

一方、これら古式上仰器を伴う堅穴住居址が方形または長方形のプランを呈し、壁にそって堅穴の一方にベッドをきり出し、或は堅穴の脇にそって鍵形にベッドをつくり出すという形態を示すことで特徴づけられる。長方形のものはおそらく長軸に棟をおく切妻風根の構造をもつものであったろう。このように方形または長方形プランをもち、ベッドをつくり出す構造のものが出現するのはすでに弥生後期も終末期に近い頃にあったと考えられる。福岡市弥永原、筑後市裏山の時期にみられ、古式土仰器を出土する筑紫郡春日町竹ヶ本、福岡市有田遺跡へとたどることができた。しかしながら前面発掘の27街区2号堅穴では古式須恵器を共伴する場合にはベッドはみられない。須恵器が5世紀代後～末期に比定できるところを参考にして、須恵器が出現する頃にはベッドはなくなるであろうと考えられる。したがって土器の上に弥生後期からの継承がある如く、堅穴構造の上にも弥生時代からの連絡をつけることができる。また堅穴内の中央にはがが組られ、あるいは床面に焼けた痕跡をとどめている場所がみられる。有田遺跡ではこれが堅穴の中央にある場合と一方で片寄る場合がみられ、またいわゆる貯蔵穴と称されるやや深い彫り穴が壁に接してつくられている例もある。しかし、かまどはまだ出現しない点で時期的に限定することができよう。

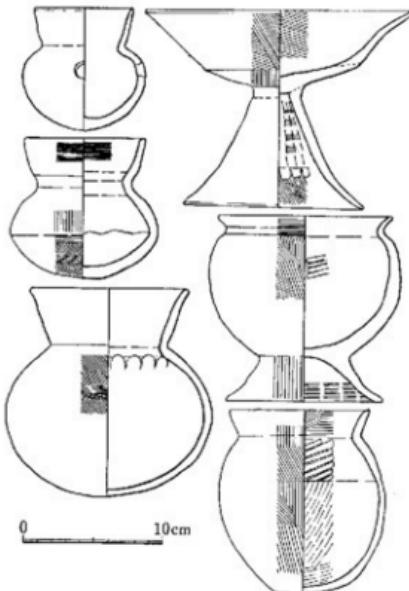
以上のように土器と堅穴構造の両面からみて、17街区住居址の時期は関東地方の和泉式文化期<sup>③</sup>、畿内地方の布留式文化期<sup>④</sup>に通ずる様相を認めることができよう。一方、これよりやや古い様相をもつとみられる31街区溝の資料には17街区住居址のものと区別できにくくものもあるが、関東地方の五頭式文化期<sup>⑤</sup>、畿内地方の庄内式文化期<sup>⑥</sup>にも通ずる資料が含まれている点が注目される。特に両者を通じてみられる菱形の叩き目手法は弥生時代のものに近いが、畿内の庄内式菱形の叩き目ほど綱かくない。また特殊な器台形上空の系統は北九州地方では福岡市老司前方後円墳の1号石室内から発見されていて5世紀中葉近くまでたどられるので、畿内では早く消滅した叩き目手法と共に布留式、和泉式相当の時期まで継承されたと考えられよう。かくして有田遺跡における古式上仰器の文化期は31街区溝で示される第Ⅰ期と17街区住居址で示される第Ⅱ期に分けることができる。

有田第Ⅰ期と、堅穴構造において類似する弥永原住居址の弥生土器を対比してみると、資料の不足は否定できないにしても、両者の間は土器型式に少くとももう一様式を設定しなければ漸移的に移行するとは云えない。そうしてこの未確認の土器様式こそ福岡地方における最初の七頭器としての位置が与えられるであろう。北九州地方の弥生終末期の土器として西新町式<sup>⑦</sup>が設定されているが、これに近い要素をもった七頭器が将来この空白を埋めるようになるであろう。東九州地方では大分県の安国寺遺跡にみる如く、弥生後期に大量に流入した畿内系備前文土器文化について庄内式土器につながる一群の土仰器があつて、最初の土仰器には著しく畿内の様相をみるとができる。また中九州地方では熊本県の野辺田式土器として突出されている土器群のなかにこの地方の最初の土仰器の様相をみることができる。九州地方に最初にあらわれた土仰器はまだ

かなり地域的特色を備えていて、その意味では弥生文化の地域性をつよく継承していたと考えられる。有田第Ⅰ期七頭器群はその後につづく時期におかれもので、著しく弥生的要素を失って齊一化の様相を示している。五頭式の要素をもつとはいえ、和泉式に接近した時期に比定される。このような時期に13・18・27街区の堅穴、溝の資料を数えることができ、前回調査の25街区堅穴や竹ヶ木遺跡の資料もほぼこれに相当する。なお、柏原郡新宮町立花貝塚上層資料は有田第Ⅰ期の不備を補う好資料であるからあわせて図示しておく。有田第Ⅱ期は一部第Ⅰ期に重複するもので、和泉式文化期でもその前半に相当するであろうと考えられる。前回調査の27街区2号堅穴はこの時期であろう。第Ⅲ期として前回調査の27街区2号堅穴の須恵器を伴う資料をあげることができる。5世紀後～末期に比定でき、和泉式文化期の後半から矢倉台式文化期にかかる頃に相当すると思われる。

有田遺跡の土師器文化は4世紀後～末期にはじまり8世紀までたどることができるのであるがその初期の時期は北九州の沿海地域に畿内型の古墳が出現した文化期であって、大和国家の政治伸長が強くすすめられはじめた頃にあたる。そうして5世紀代には有田台地には集落が展開した。この地域に8世紀まで継続して集落が営まれたのは、有田集落の人々がこの台地の周間に広がる冲積平野に依存して水稻農耕を主な生業としたからにはかならない。前回の報告で有田周辺の歴史地理的環境にみた如く、有田周辺は埴燒土から成る稻作に最も適した土性を示していたのである。律令時代に下っても有田・小田部付近が田部郷として編成されたように、すでに上層器文化の時期にこの集落の人々は支配層から田部の民として掌握されたのである。（小田富士雄）

- ①渡辺正気「筑紫都春日町竹ヶ木遺跡調査報告」（福岡県文化財調査報告書第22編）昭和37年
- ②「福岡県佐永原遺跡調査報告書」（福岡県文化財調査報告書第32集）昭和40年  
三野泰「福岡市佐永原遺跡調査報告」昭和42年
- ③杉原在介・中山尊子「土師器」（日本考古学講座5）昭和30年
- ④末永雅雄・小林行徳・中村春夫「大河に於ける土師器住居址の新例」（考古学9卷10号）昭和13年
- ⑤大塚初重「埼玉県東松山市柏崎五頭遺跡の土器」（弥生式土器叢成編2）昭和36年
- ⑥山中雄「布留式以前」（考古学研究12卷2号）昭和40年
- ⑦森貞次郎「九州」（日本の考古学III・弥生時代）昭和41年
- ⑧鈴山謹信「大分県国東町安國寺弥生式遺跡の調査」昭和33年
- ⑨乙益重隆「九州地方」（弥生式土器叢成編1解説）昭和39年
- ⑩森貞次郎氏調査資料による  
〔前原弘道「土師式文化前期に対する一考察——矢倉台式土器の提唱——」（西郊文化第8輯）昭和29年〕



第19図 立花貝塚上層の土師器

## II 有田遺跡発見の出土古代米

昭和42年2～3月の調査にあたり、31街区の袋状貯蔵穴（弥生文化期）の東壁に円形窓穴の一部が露出していた。この円形窓穴は現在の深さ14cmで、その大部分がけずられ、消滅していた。この窓穴中に炭化米が残存しており、炭化米中に板付1式の甕の口邊が発見されており、窓穴内の土器も復元、板付I式であり、ほぼその年代を想定できる。先ず窓穴をつくり、それが埋れた後に、袋状貯蔵穴をつくったものと考えられる。

炭化米は、塊状にかたまとったものもあり、ビニール採集袋一杯に採集することができ、少くとも弥生文化前期の米として、近年最も多い資料を得ることができたのである。

炭化米は、現在穀の外殻が剥落して、すべて玄米状をなしており、胚芽の部分も欠落している。九州大学農学部育種学研究室の永松土巳教授および研究室の方々、とくに石川文雄氏の好意により、炭化米粒の測定が行われた。粒長は最大4.6mm、最小4.1mm、40例の平均4.46mmをはかる。粒幅は最大3.4mm、最小2.6mm、40例の平均2.8mm、長幅比は最大2.04、最小1.37、40例の平均1.58となる。出土したものに、初の原形をとどめたもののがなく、また窓穴の時期の土器に擦痕を有するものがいなければ残念であるが、いまほぼ同一の時期である福岡市板付遺跡の溝および窓穴から、炭化米および穀の庄底が発見されているのは参考になる。佐藤敏也氏によると、板付の炭化米（玄米状）9例の平均で粒長4.44mm、粒幅2.54mm、長幅比1.74をはかり、長さはほぼ同じである。森貞次郎氏の行った板付土器擦痕27例の平均値では長さ6.83mm、幅3.75mm、長幅比1.82をはかる。板付および有田の炭化米の場合、もとの米からの収縮率が同一条件、同比率であったかどうかは問題であるが、両者の長さはきわめて近く、例の長さもおそらく近いものであったと想定される。

松尾孝崇博士によると現在の栽培稻穀（384例）の平均値は長さ6.81mm、幅3.31mm、比2.05をはかるという。土器の収縮率をみても、板付および有田の例

日本在来イネの玄米の種類別測定値の平均

種類	例	粒長	粒幅	長幅比
ウルチ	616	5.20	3.20	1.70
モチ	534	5.06	3.00	1.69
モ 稲	42	5.13	3.10	1.66
ホ 稲	80	5.39	2.99	1.81
セ 稲	28	5.69	3.08	1.94
モ 品	62	5.26	3.06	1.72

永松土巳・石川文雄「日本作物学会九州支部会報第29号」(1967年12月)による。

福岡市有田出土古代米の計測値

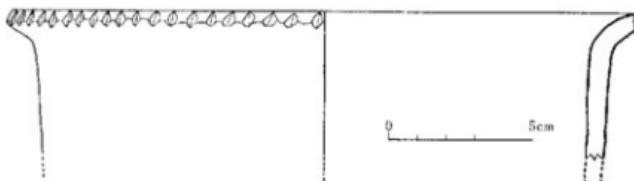
	粒長	粒幅	長幅比	粒長	粒幅	長幅比	
1	4.3	3.4	1.26	21	4.2	2.8	1.5
2	4.3	2.5	1.72	22	4.0	2.8	1.43
3	4.5	3.0	1.5	23	4.2	2.6	1.62
4	4.3	2.9	1.48	24	4.2	3.0	1.4
5	4.3	3.0	1.43	25	5.0	2.6	1.93
6	4.7	3.2	1.47	26	4.3	3.0	1.43
7	4.7	2.9	1.62	27	4.4	3.2	1.38
8	4.4	3.0	1.47	28	4.3	2.5	1.72
9	4.6	2.9	1.59	29	4.5	2.6	1.73
10	4.8	3.1	1.55	30	4.4	2.6	1.69
11	4.6	2.7	1.70	31	4.3	2.5	1.72
12	4.5	3.0	1.5	32	5.1	2.5	2.04
13	4.9	2.8	1.75	33	4.2	2.8	1.5
14	4.9	3.2	1.53	34	4.4	2.5	1.76
15	4.6	2.7	1.70	35	4.3	2.5	1.72
16	4.1	3.0	1.37	36	4.6	2.8	1.64
17	4.7	3.0	1.57	37	4.5	3.0	1.5
18	4.3	2.6	1.65	38	4.3	2.9	1.48
19	4.4	2.6	1.60	39	4.4	2.8	1.57
20	4.6	3.0	1.53	40	4.4	3.1	1.42
平均	4.53	2.93	1.55	平均	4.4	2.70	1.60
1968年1月8日、 石川文雄氏測				平均	4.46	2.82	1.58

### 参考文献

- 稻作史研究会「近畿北部の稻作栽培」
- 「出土古代米」昭29
- 森貞次郎・岡崎敬「福岡県・板付遺跡」（『日本農耕文化の形成』所収）昭36
- 松尾孝崇「栽培稻に関する種生産的研究」（『農業技術研究所報告』D, 第3号 昭27）
- 永松土巳・石川文雄「本邦在来イネの玄米の形状と大きさの変遷」（日本作物学会九州支部会報第29号）1967年

および玄米は長さからみても現在のものとほほかわらぬものであったことになる。

昭和41年調査の行われた府津古宇木汲田貝塚の場合も、ほぼ近い所見がみられ、有田をはじめとする弥生文化初期の米はすでに日本型 (*japonica*) であり、印度型 (*indica*) がみられない点はきわめて注意すべきことである。（永松土巳、石川文雄、岡崎敬）



第20図 炭化米共伴の変形土器

### III 有田遺跡発見の球状酸化鉄の冶金学的分析

昭和42年度、13街区で、東西2.75m、南北2.50mの正方形開丸の竪穴があらわれ、東壁の竪付近に運出しの施設（窓破片）があり、竪穴上に土師器、須恵器（皿、碗）がみられ、その様式より8世紀（奈良時代）のものと想定された。この西壁より、球状酸化鉄塊があり、竪穴中央には焼土、その上に灰黄色混砂粘土をみることができた。

この球状酸化鉄を金属顕微鏡などで鉱物組成を検討してみると、鉄錆（slag）ではなく、形状はほぼ現代製鉄のペレット（pellet）に類似している。この球状酸化鉄には、酸化チタン（ $TiO_2$ ）0.88～2.10%，酸化ヴァナジウム（ $V_2O_5$ ）0.056～0.087%をふくみ、チタンをふくむことからほぼ砂鉄を原料としたことは明らかである。おそらく砂鉄を原料として一応半還元を行い、一個一個、人工的に丸い形にしたものを作り、さらに通風による還元を考慮して球状化が行われたものと想定される。

その化学分析値には、チタン（Ti）、ヴァナジウム（V）の存在がみとめられ、近くの海岸砂鉄を利用したと考えられる。分析値にはばらつきがあり、当時規格化された製錆が行われたものでないことを示す。また球状酸化鉄中に、現在合水酸化鉄（ $Fe_2O_3 \cdot nH_2O$ ）としてふくまれている部分は、当時、金属鉄であったと考えられる。

現在、球状酸化鉄中に初晶の樹枝状結晶が残留しているのがみとめられる。これがいかなる化合物の初晶であるか、現在X線マイクロで検討中である。

この球状酸化鉄が鉄錆でないことは明らかである。むしろ形状からみて玉鋼に近いと考えられる。これが中間製品で、これをもとにして、いろいろの製品をつくったものであろう。

太宰府蔵司の南にあるタクミ司址とつたえられる地点より、ほぼ奈良時代と推定される鉄錆の芯の部分が発見されている。火災にあったため表面は酸化しており、外部が磁鐵鉄（ $Fe_3O_4$ ）化している。内部は金属鉄がよく保たれており、炭素（C）2.86%あり、酸化チタン（ $TiO_2$ ）

3.12%，酸化ヴァナジウム0.098%の組成をしめし，この原材はほぼ砂鉄よりつくられたことを示している。有田遺跡の球状酸化鉄が，これらの武器，工具などの原材となつても決して不思議ではない。

北九州の玄海灘に面する海岸は砂丘が発達し，博多湾の内外にも，北崎，今津，今宿，生の松原，箱崎，新宮，津屋崎などの海岸砂丘があり，現在でもこれらの砂丘に砂鉄を多く見出すことができる。これらの砂丘の砂鉄は後背の花崗岩（granite），巨晶花崗岩（pegmatite），玄武岩（basalt）などの岩石が分解して形成されたものであり，玄武岩を母岩とするものはきわめて目が細かく，花崗岩のものはやや目があらい傾向がある。これらの砂鉄は2~3%のチタンをふくんでいる。現在，8倍大の実体顕微鏡で観察することにより，産地別にはば区別することができる。

有田遺跡の堅穴では，確実に製錬のための炉，フイゴ口などを検証し得なかったので，製鉄址とは断定し得ないが，鍛造などの行われたことは疑いなく，また有田に近い生の松原にも砂鉄を多くふくみ，生の松原において製錬されたか，有田で製錬されたか将来の検討がのぞまる。この点，箱崎，名島浜に近く，多々良の地名がのこっていることは，砂丘の砂鉄とタタラとの関係について暗示を与えるものが多い。この点，現在「たたら研究会」や和島誠一氏をはじめとする「日本考古学協会製鉄委員会」で行いつつある山陽・山陰の「たたら」製鉄址の調査や長谷川熊彦氏の永年の砂鉄調査と平行して，今後の研究課題たるを見失はない。

「延喜式」卷24，主計寮上に，筑前國の貢品の中に，銀，鉄がふくまれている。これは，以上のことから考えて，筑前海岸砂丘の砂鉄を原料としてつくられたものとして相違なく，今後，筑前海岸砂丘およびそれに近い地域における砂鉄製錬の問題に有田発見の球状酸化鉄は重要な問題をなげかけたものということができる。

（坂田武彦・岡崎敬）



等21図 太宰府鐵司南方発見の鉄錬

#### IV 律令時代における早良平野の開発（第22図）

大化の改新によって成立した律令国家体制のもとでは，地方行政区画として国・郡・里が設けられた。里制の成立については問題点もあるが，郡制の成立よりも遅かったと思われる。しかしこの里制も奈良時代の始めに廢止され，その後は国・郡・郷制となつたが，里（郷）は郡とは異なり，消滅，再編成，新設などの動きがかなりあったと思われる。早良郡の成立については明確ではないが，サワラはセフリ・シウリ・ソールなどに通じ，がんらい朝鮮語で大きな集落を意味し，朝鮮との関係が考えられる。朝鮮との関係については神功皇后の5年に新羅に渡って活躍した古代族長層の一人で，武内宿禰の子である葛城製津彦（朝鮮側の史料には沙至比麿）が慶尚南

道梁山の地にある草羅城を抜いて帰った。<sup>(1)</sup> この草羅と早良が同じ読みかたであることにも留意しなければならないが、天平宝字2年12月22日、同3年8月5日の般世音寺奴婢帳の中に早良郡司に早良勝がなっていた記録がある。勝は村主とも古くが、この勝は帰化人に与えられた姓である。のことから早良郡は朝鮮で活躍した武内宿祢を中心とする一族の氏族が朝鮮半島の先進文化、技術を持つ帰化人を早良郡に導入して統率したものと思われる。このことは早良郡の中に平群・早良・曾我の各郷があり、平群・早良・曾我の各臣の祖は武内宿祢であったという伝説があり、武内宿祢との関係が深いと思われる。

律令国家の地方政治を行う権限として郡には郡司が置かれたが、郡司は主として地方豪族が任せられ、終身官で世襲制であったが、早良郡司は天平宝字2年の般世音寺奴婢帳によれば、姓名が平群部（矢名）で、官位は令制の最下位の官職である主根、外少初位上で身分は低い。姓名が平群部であることから、早良郡家は和名抄にある平群郷にあったのではないかと思われる。これより約160年後の延喜16年8月3日に早良郡司三宅春則宅で片輪の牛が生まれた記録がある。<sup>(2)</sup> 筑前続風土記に「三宅氏は阿蘇神の末孫なり」とあるが、阿蘇神の末孫とすれば、片江に阿蘇神社があり、郡家は毗伊郷にあったと思われ、郡家の移動が考えられる。しかし、前述の般世音寺奴婢帳の中に額田郷三家連の記録があり、この三家連の系統が三宅春則ではないだろうか。郡家の所在地には各種の官衙、租を収納する郡倉があって、これらを中心に官吏や職務者が居住していると思われる。早良郡の總社がどこであったかも明確ではなく、早良郡家の位置を明瞭にすることができない。

早良郡の郷名は「和名抄」によると、毗伊<sup>(3)</sup>（現在の種井川流域、片江付近はかつて種井川村といっていた）、能解<sup>(4)</sup>（現在の野芥）、額田（現在の野方）、早良（現在の鹿原）、平群（現在の戸切）、田部（現在の小田部）、曾我（明確ではないが、永禄4年11月25日の飯茂社占文書類写に曾我部村の記載があり、これによれば現在の羽根戸・吉武付近）の7郷であった。筑前国15郡の中では平均的郷類に属し、令に規定されている4里以上、7里以下の下郷にあたると思われる。

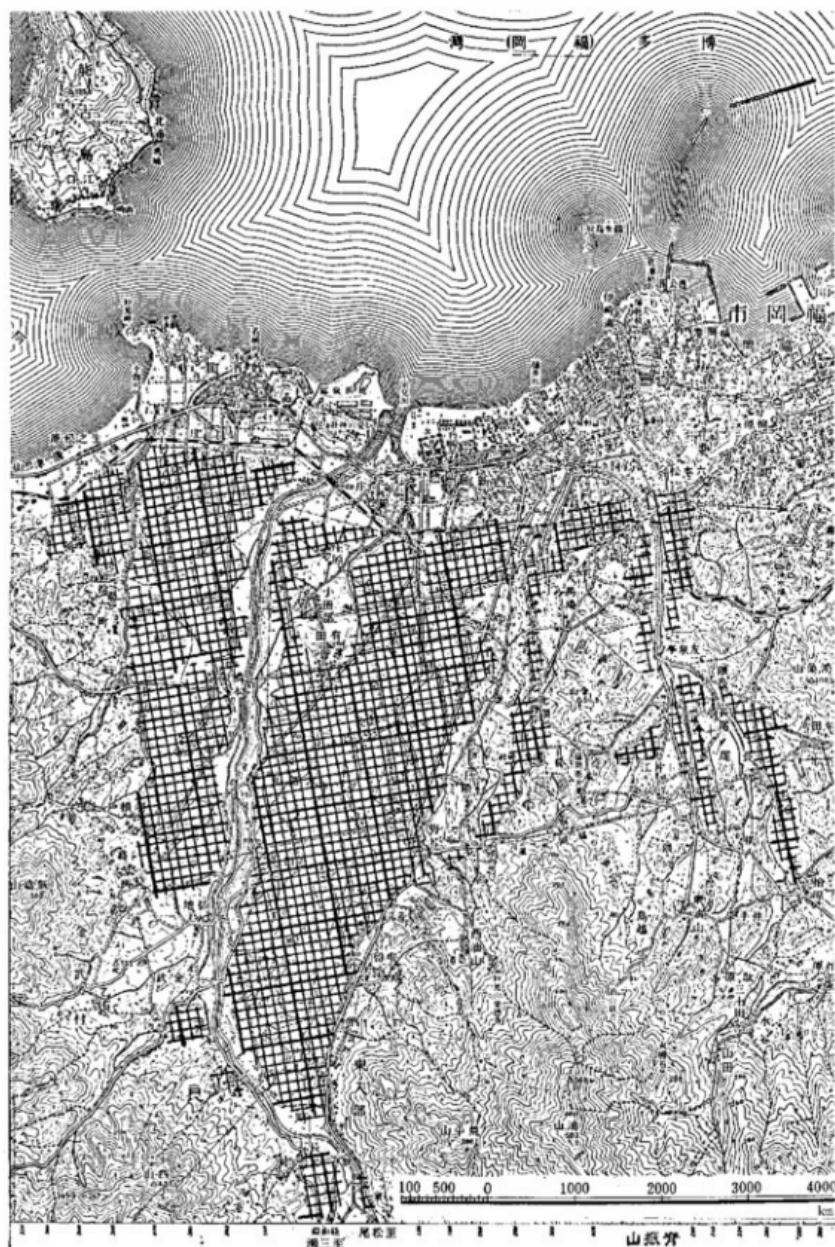
律令時代における國・郡・里制の成立の背景には地方を支配している旧勢力者を排除して、地域民を律令国家に服属させる目的もあったが、地方統治の目的の一つに班田制度を実施しようとしたことである。大化の改新という権力の集中をもって始めて条里制の開拓が行なわれたとは思われないが、条里制に先行した阡陌地割はいつどろどのようにして施行されたのかは明確ではないが、4世紀以後の朝鮮侵略によって中央行政だけの独占ではなく、従軍した地方豪長層によつて各地に持ち帰られ、その成功を誇示したものが各地に残る前方後円墳で、条里制開拓（大化前代の土地が代をもって数えられていたが、その代は高麗尺をもって施行されていた）だとみる見解もある。しかし、早良平野には前方後円墳を見い出すことができないのは、伊都國と奴国の中間地域にあって緩衝地帯ではなかったかと思われる。早良平野に領主、国造層の指導者が存在しなかったので、大陸に近い地理的位置も考慮して、武内宿祢を中心とする一族が帰化人を伴なつて定着したのではないだろうか。条里制開拓技術が渡来する以前の生産基盤は湿地帯か谷水田の地域に限定されていたのではないかと思われる。条里制開拓技術の導入とともに早良平野でも集

落周辺の広大な未開拓の氾濫原を奴隸、地域民を動員して開拓したのではないかと思われる。早良郡の条里を具体的にみるとすべて同一の方位 ( $N 10^{\circ} W$ ) に統一されて施行されている。条里制開拓以前の早良平野の景観がどのようであったかは明確ではないが、開拓が容易ではなかったことは当然であろう。したがって、統一された条里であるから同時に施行されたのではなく、ある程度の施行単位ごとに開拓されたのではないかと思われる。条里制開拓は水田化を計るために灌漑用水を必要とし、土地割が地形に左右される場合もあるが、早良郡の条里の基準線は筑肥線姪浜駅裏の五塔山から南の背坂山の峯への見通し線ではないかと思われる。条里的坪並の復原は条（旗前では岡）および里の復原の重要な手がかりになるが、坪並と条里的数え込みかたが原則に一致しない地域もあり、慎重を要する。早良郡の条里的坪並の復原に役立つ坪付小字名は通称名も含めて12あるが、田眼の角の北に市ノ坪、金武の丸の西に三十五・五ノ坪、東入部の十一がそれぞれ比較的近い位置にあり、坪並の復原ができる。坪並は東北隅を一ノ坪、西北隅を三十六ノ坪とする連続式であることがわかる。条里的北限は壱岐神社から曾根原・五島山・木津・庄原・筑肥線を結ぶ線で、十郎川から室見川にかけては大体海拔  $1.5\text{ m}$ 、室見川から櫛井川にかけては地域によって異なるが、2ないし  $2.5\text{ m}$  が条里的北限となっている。坪並と条里的数え込みかたが原則に一致した場合、条里制土地割の分布から、早良郡の条里に関する寛弘2年11月15<sup>(\*)</sup>日古文書にある7図3里には片江付近になる。旧村境が条里的里境界になっているのは、旧姪浜村と旧下山門村、旧戸切村と旧羽根戸村に過ぎない。前者は条里でいえば10・11図、後者は6・7里が村境になっていたと思われる。

大化の改新によって国家の政治機構のなかで運営されたものに駅伝の制がある。この制度が明確化したのは50年後に大宝令が出てからである。駅は30里（当時の1里は6町で、のちの5里）ごとに置くのを原則としたが、地形の関係などによって多少の長短がある。早良郡には太宰府から壱岐・対馬と連絡する官道の整備が行なわれた。延喜式によれば額田駅があり、額田駅は現在の野方である。額田駅から東へは形河郡の石瀬駅（現在の三宅）へ、額田駅から西へは柏原郡の比奈駅（現在の周船寺付近）にそれぞれ通じていた。問題は早良平野のどこを官道が通っていたかであるが、最近、小字名、微地形学の立場からの研究が行なわれている。額田駅から西へは野方から広石を越えて柏原郡へ、東へは明確ではないが、野方から道腰・戸切・河原・次郎丸・免・七隈・片江・松原を経て那珂郡に通じていたものと思われる。（口野尚志）

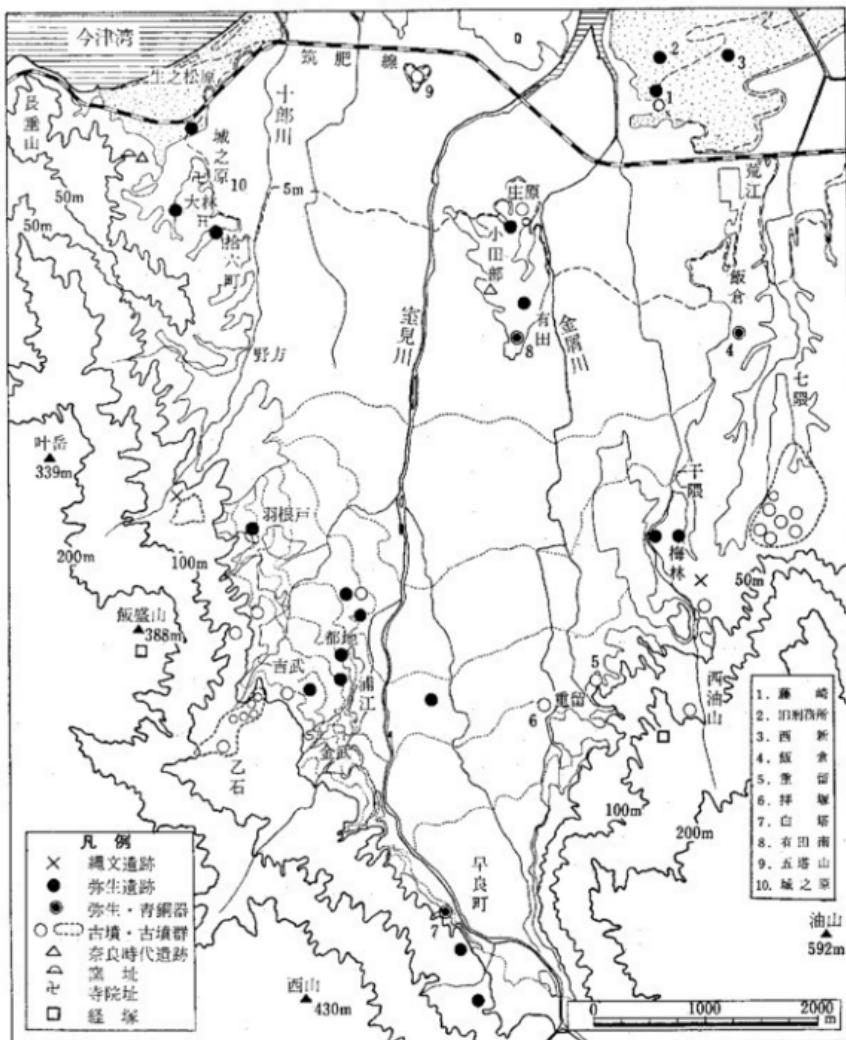
#### 註

- (1) 日本書紀卷9 神功皇后貞观5年春3月癸卯朔己酉。(前略) 即知欣而捉新羅使者三人。納艦中以火焚而殺。乃詔斬頭。次丁酉難津。拔草逐城追之。(以下略)
- (2) 奈良道文 下巻 781—783頁
- (3) 大日本史料第1編之4 825頁 櫻翻天皇 延喜16年8月22日(856年)【日本紀略】  
「8月22日，申辰，太宰府宮上，欽前國早良郡司，今月8日解云，十郎司三宅春則也，今月3日，未刻牝牛生犢，頭面分，頭腹合射，前足有四，後脚有四，曰其形似言上者，府令ト筆」
- (4) 九州大学経営元吉教授所蔵(九州大学文学部国史学研究室所蔵の同写真による)
- (5) 落合重信『条里制』吉川弘文館 昭和42年 140頁
- (6) 平安道文 第2巻 442 592—593頁



第22図 早良平野の条里圖

## 第4章 有田周辺の遺跡・遺物（第23～40図）



第23図 早良平野の地形と遺跡

## I 早良平野出土の土器・石器（第23・24・25図）

第一次発掘調査（昭和42年）以来、通算五度に渡って、ゼネラル・サーベイを行なった。その際、調査されたもの一部をまとめて報告する。遺物は主に福岡市十六町宮前・吉本武治氏、同金武乙石・牛尾準一氏、福岡市立西福岡中学校、同高校小学校の所有に帰するものであるが、中には出土状態や出土地名の不明のものがかなりあり、遺跡の性格の認定に困難をきたすものもあるが、出土地域ごとに以下叙述する。

### 〔土 器〕

#### 福岡市生の松原（第24図9）

今津湾の左舷回流によって、生の松原は長垂山を起点として西から東に等高線5mを越える、弓状砂丘が形成されている。福岡市城ノ原の丹塗り壺もこの砂丘上の筑肥線付近からの発見によるものであるらしい。明確な出土地点は不明である。が、おそらくこの砂丘近辺から発見されたと思われる甕棺の口縁部は、淡い赤褐色を呈し、焼成は良好で、規格的な造形を示しており、弥生中期初頭の楕ノ越式に相当するものである。

#### 福岡市十六町大林（第24図15、第25図27）

早良平野西麓沿いの十六町畠地と城ノ原庵寺址の中間に位置する熊野神社の西方の叶岳から伸びる低丘陵が宅地造成工事のため削平された際に出土したもので、吉本武治氏の所蔵に留する。出土状況は詳びらかでない。**15**の土師高杯は脚、把共一度の合げで脚部に二孔以上の透孔があり、杯部は上半部で、緩かな外反をみせる。丹塗りの痕を痕跡的に残しているが、良質粘土を使い、焼成も良好な作品である。**4**世紀後半期のものであろう。**27**は口縁をわずかに折り返した変形土器で指圧痕著しく、その上に刷毛による整形が施されている。叩き痕が外表面にわずかに残っている。**4**～**5**世紀のものであろう。

#### 福岡市十六町宮前（第24図1・2）

遺跡は前述の熊野神社の南方前面で、西側の狭隘な谷沿いに開けた水田が十郎川によって形成された冲積平野に接する地点よりややさかのはった山麓沿いの包含地で、谷沿いの溝條築の際に発見されたものである。**1**は胎土に大粒の砂粒を含み、丹塗りで焼成良好な弥生時代中期後半の変形土器である。**2**は胎土に多量の砂粒を含み、表面に指圧痕の多く整形の粗雑な、厚ぼったい鼓形の器合で弥生中期のものである。他に丹塗りの高杯、変形土器、瓶等も出土している。弥生中期後半の土器を主に出土するが、後期初頭の変形土器等も若干含まれている。

#### 福岡市羽根戸（第24図4・5・6・7）

飯盛山と叶岳の谷沿いに流れる道原川が扇状地を形成するが、羽根戸部落の西北部の飯盛山山麓縁辺の谷の尖端の扇状地上に形成された散布地で、水田耕作中に発見されたものである。**6**、**7**は口縁が起ち上がり、肩がやや張り、丸底を形成する變形土器で、外表面は叩きの上に刷毛整形が施されているが、上半分には細い刷毛で下半分には粗い刷毛が使いわけられている。内面は細い刷毛で仕上げが行なわれている。弥生終末期から土師期にかかる頃のものであろう。**5**は杏形器合（土製支脚）で頂部の一方がややとび出し、頂部に小孔を有する高さ11cmのもので全面

に叩きが施されている。6・7に伴出したと考えられるが、さらに一期古い時期より出現する可能性がある。

#### 福岡市金武都地（第24図11・12）

西方山塊より多数の小河川が花崗岩を解析、流出して扇状地を形成しながら室見川に流入するが、本遺跡は形成された扇状地の尖端に近い、等高30m前後の都地部落の縁部に位置する。**12**は赤褐色を呈する菱形土器で、板付Ⅱ式末期の、いわゆる絶の甲式土器に近い形態を示している。**11**は胎土に右英粒を含んだ高杯形土器で丹塗りが行なわれている。全体に厚みある形成で、口縁T字状をなす弥生中期後半の土器である。部落南端の金武小学校からかって弥生中期の壺棺が発見され、都地部落より住居址も発見されている。同地出土品中に弥生後期の菱形土器等もあるので、本遺跡は弥生前期末より後期に及ぶものであろう。

#### 福岡市金武高木（第24図13・14）

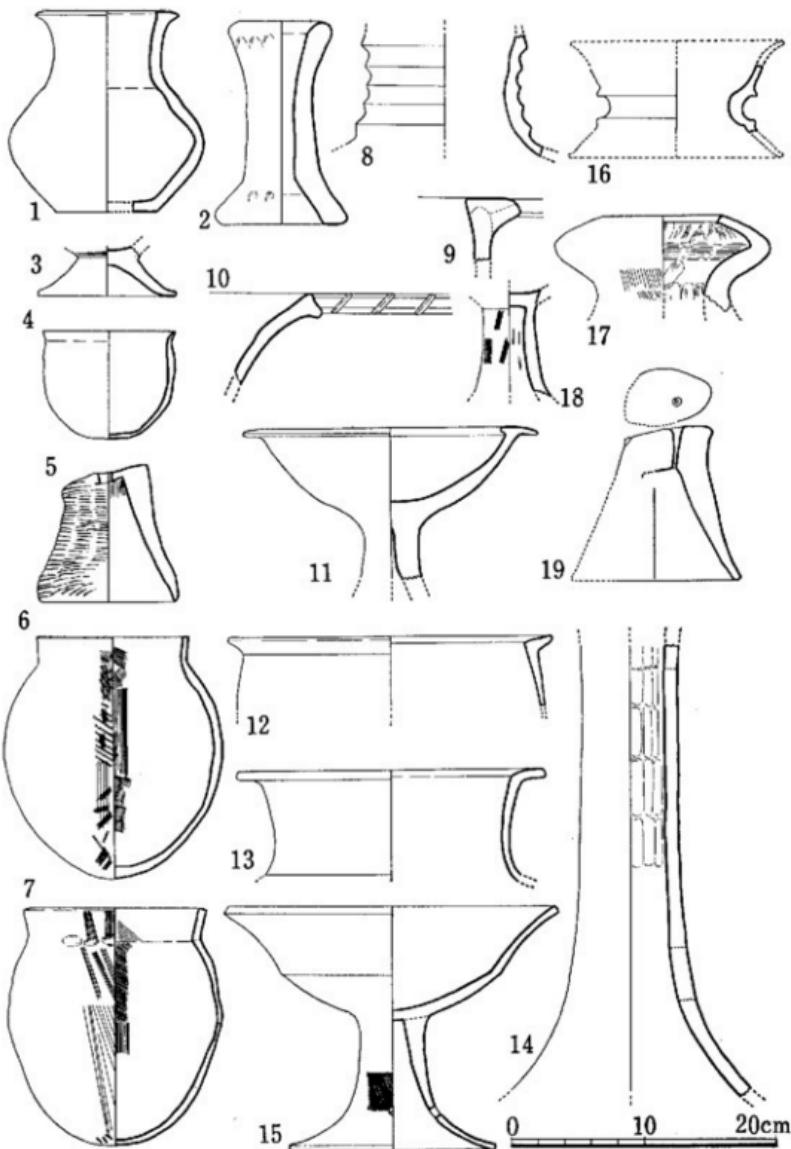
遺跡は都地北方400mの地点で、扇状地の尖端の等高25～6m地点に位置し、遺物は水田耕作中に出土したものである。**13**は口縁がわずかに稜を持って折れまがり平坦部を形成するが十分に伸びきらない。頭部は直立に近い立ち上がりをみせ肩につながる。城ノ越式の菱形土器である。**14**は大型器台で全面に丹塗り磨研が施されている。弥生中期後半のもので、祭祀関係の土器と考えられ、朝倉平野、福岡平野等にも散見される。**3**は高木より室見川沿いにさかのぼった浦江出土のものであるが、弥生後期末頃より出現し始める脚付鉢形土器の脚台であろう。

#### 福岡市飯倉（第24図16・17・18・19）

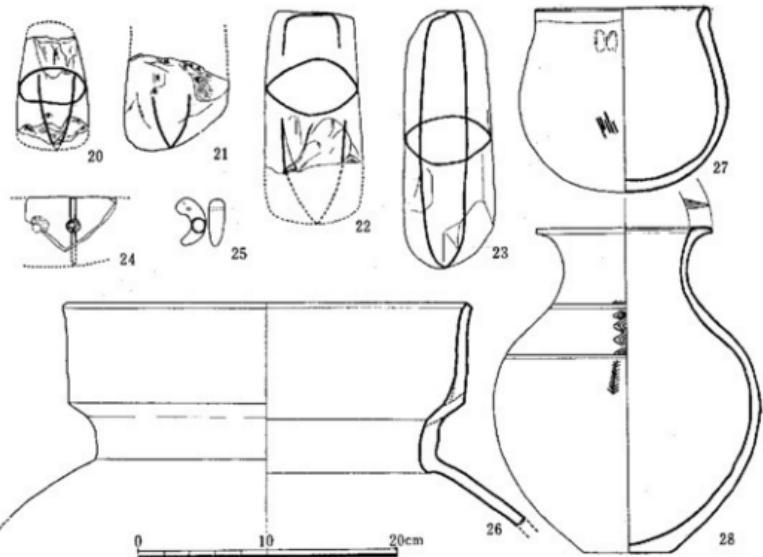
山土の詳細については明らかでない。西福岡中学の所蔵品である。**17**は弥生中期後半の長頸壺の袋状口縁で石英細砂粒を含む胎土でやや軟質に焼成され、黄色を呈す。内面指先による接合調整痕がみられる。**19**は弥生後期の杏形器台で頂部の片方が突びだし、頂部に円孔を有し、胎土に細砂粒を混じ、表面赤褐色を呈し、研磨されている。**16**は土師器台で皿部、脚部ともに上下に広がり、その接合部はC状を呈し、この部分に透孔を有す。表面黄褐色で、研磨されている。4世紀後半のものであろう。**26・28**は出土地不明で、西福岡中学の所有に帰す。**28**は板付Ⅱ式末の壺形土器で肩から胴にかけて四段の無軸羽状文、胴部に綾杉文、平坦な口縁上に羽状文が具施設施されている。追貫川以東に特徴的な高楕式土器である。**26**は二重口縁が直立した壺棺かと考えられる土師壺形土器で4世紀代のものであろう。

#### 〔石器〕（第25図20・21・22・23・24・25）

**20**は金武乙石付近出土の蛇紋岩性の小型石斧で、縄文後晩期の遺跡にしばしば出土する。早良平野の櫛文遺跡は羽根戸、梅林の丘陵にかけて発見されているのみであるが、今後の調査によつては新資料の開拓も可能であろう。**21・22・23**はいずれも玄武岩性の大型蛤刃石斧で、**21・22**は乙石、**23**は大林出土のものである。早良平野内ではほかに、板盛・有田にも同質の石斧が発見されているが有田遺跡のV字状溝出土の、弥生前期に伴出す大型蛤刃石斧以外はほとんど玄武岩性石斧であり、今山の石斧製作場との密接な関連が考えられる。**24**は砂岩質頁岩性の外湾刃石庵丁で都地出土のもので、破片であるが、身部薄く、孔は大きく、形成、材質とも古い型式のものである。**25**は大林出土で砂岩とも考えられる粗質の石材を使用した勾玉である。（下条信行）

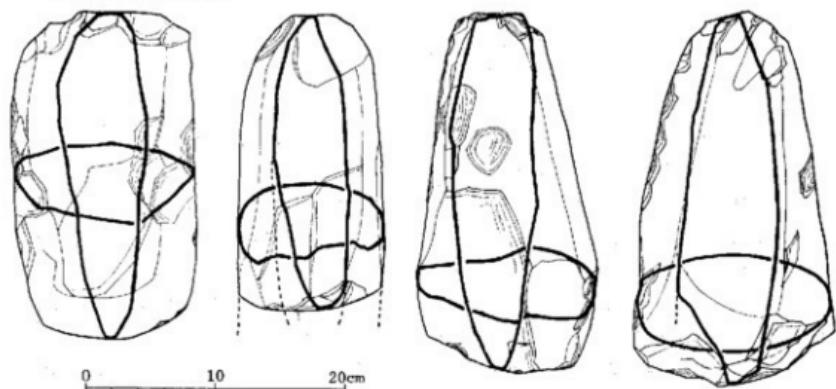


第24図 早良平野出土の遺物実測図 (1)



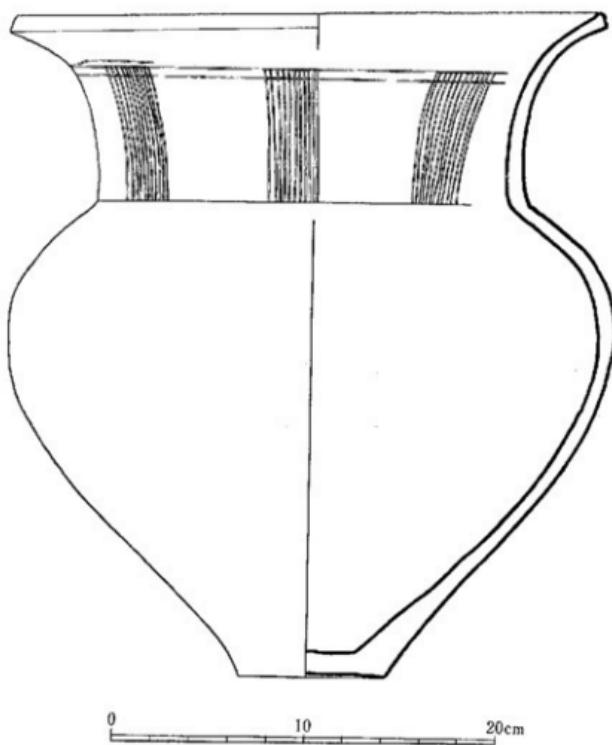
第25図 早良平野出土の遺物実測図 (2)

1,2…治六町宮前出土 3…金武浦江出土 4,5,6,7…舟根戸出土 8…重留出土 9…生ノ松原出土  
10…有田出土 11,12…都地出土 13,14…金武高木出土 15…治六町大林出土 16,17,18,19…飯倉出土  
20,21,22…乙石出土 23,25,27…治六町大林出土 24…都地吉土 26,28…出土地不明  
(3,4,5,6,7,8,11,12,13,14,20,21,22,24…牛尾氏蔵 1,2,15,23,25,27…吉本氏蔵 6,10,16,17,18,19,  
26,28…西福岡中学校蔵)



第26図 有田遺跡採集石器

II 城ノ原出土の丹塗磨研壺（第27図）



第27図 城ノ原出土の丹塗磨研壺実測図

福岡市の西部、国鉄筑肥線の沿線海岸部は砂洲が発達している。この壺はこの砂丘地帯から発見されたと伝えられるが、それを裏付けるかのように器面は風化されていない。高さ35cmを測る弥生時代中期の大形壺である。底部のしまった珠状陶に朝顔形に外反した口頸部がとりつけられていて、箒による器面の磨研調整がよくゆきとぞいている。箒磨きは胸部が左右に、口頸部は上下方向に施されるが、頸部には箒先による11~12本一組の線が一定間隔で暗文風に加えられている。さらに同様な手法による二重の横線が頸部上方にめぐっている。胸部と口頸部の形成はよく均整を保ち、精選された胎土を箒磨きの後に丹塗りで仕上げたことが一段とこの壺の美しさを盛上げる効果を發揮している。弥生時代中期前半頃の須歯式土器を代表する逸品である。重要文化財指定。沢田藤一郎氏蔵。（小田富士雄）

### III 有田壺棺遺跡の壺棺と銅戈

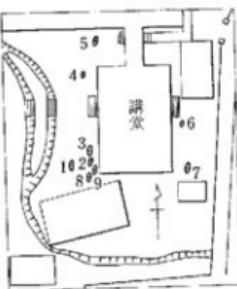
(第28・29・30・31図、図版14—2)

明治31年、当時の高等小学校講堂建設のための整地工事で壺群が発見されたが、昭和24年1月、講堂付近に残っていた9基が、井元敏男・三野章氏らを中心

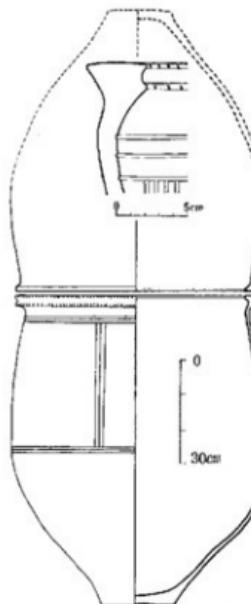
として調査され、森貞次郎・渡辺正氣も参加した。第2号壺棺から写真のような薄肉の銅戈が発見された。第2号壺棺は弥生前期終末の様式をもち、第8号壺棺は、

下蓋は2号と同じ様式であるが、上蓋は中期初頭の新様式のものを用いていることが注目される。他は中期の中頃様式をもつが、第2号壺棺から発見された薄肉の銅戈は、類品が佐賀県唐津市宇木・汲田に二口あり、各々弥生中期前半の壺棺から発見されているが、非実用品としての要素をもち、しかも仿製らしいことが注目される。

銅戈は福岡教育大学所蔵。(森貞次郎)

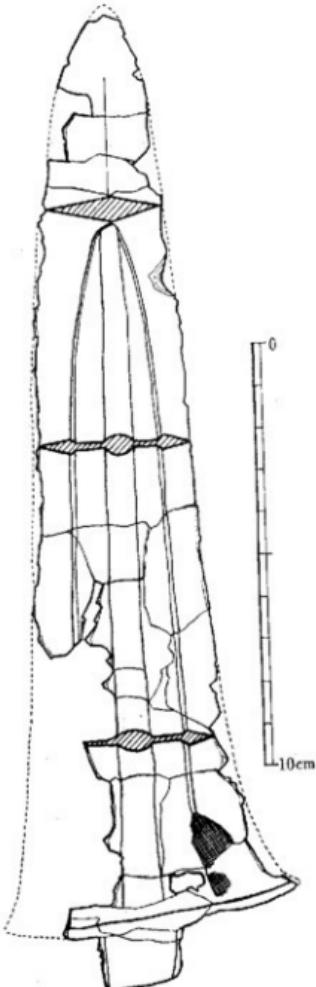


第28図 有田壺棺遺跡略図



第29図 有田8号壺棺空穴測図

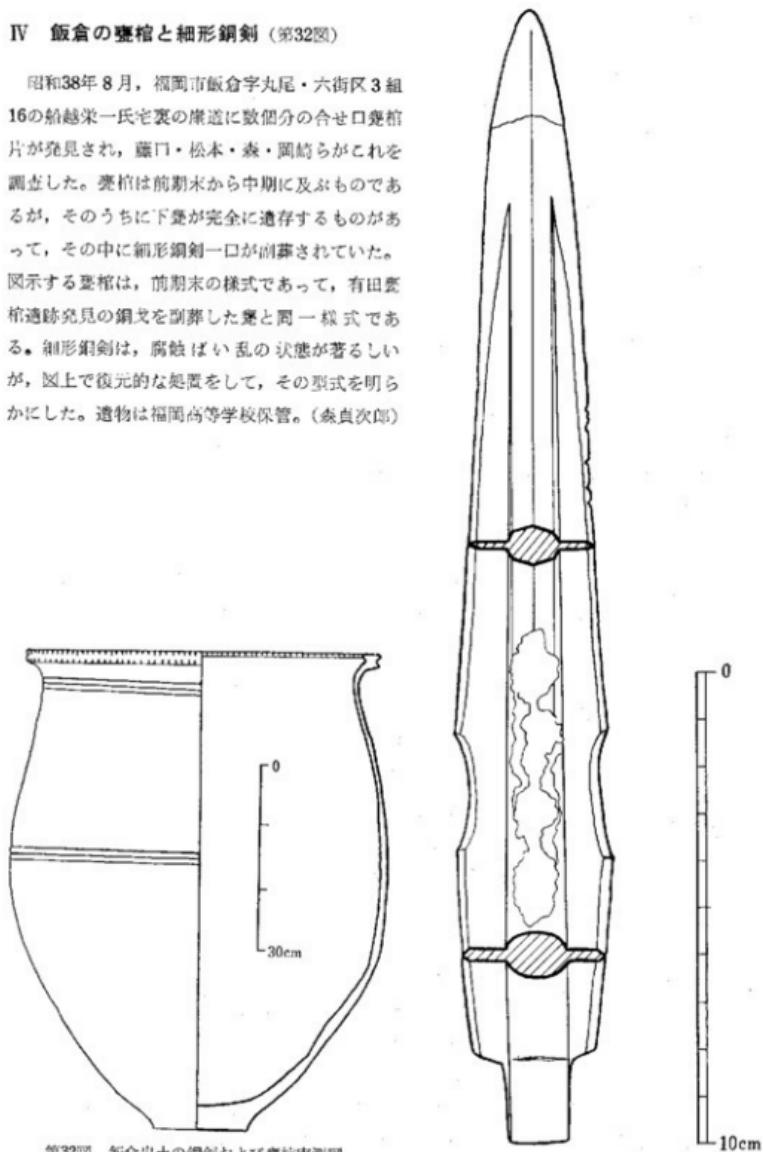
第30図 有田2号壺棺断面図(上蓋中の図)



第31図 有田壺棺遺跡出土の銅戈実物図

#### IV 飯倉の壺棺と細形銅劍 (第32図)

昭和38年8月、福岡市飯倉字丸尾・六街区3組16の船越栄一氏宅裏の崖道に数個分の合せ口壺棺片が発見され、藤口・松本・森・岡崎らがこれを調査した。壺棺は前期末から中期に及ぶものであるが、そのうちに下壺が完全に遺存するものがあって、その中に細形銅劍一口が副葬されていた。図示する壺棺は、前期末の様式であって、有田壺棺遺跡発見の銅戈を副葬した壺と同一様式である。細形銅劍は、腐蝕ばい乱の状態が著るしいが、図上で復元的な処置をして、その型式を明らかにした。遺物は福岡高等学校保管。(森貞次郎)



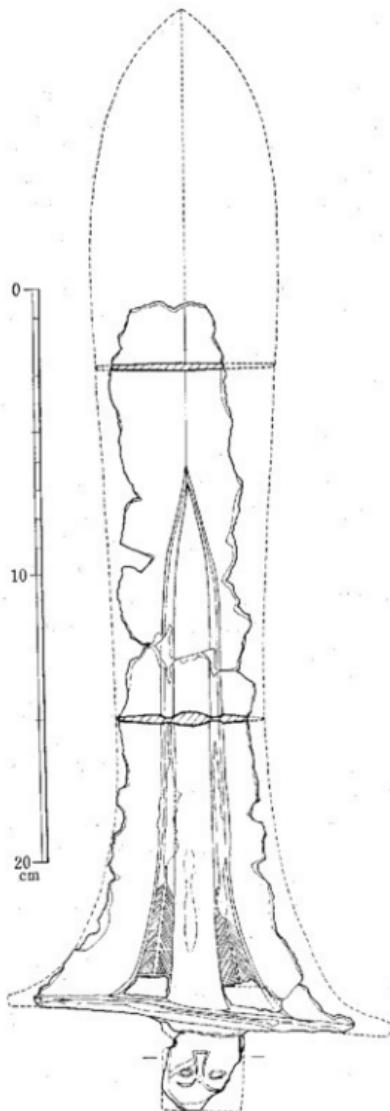
第32図 飯倉出土の銅劍および壺棺実測図

## V 白塔発見の人面鋲出銅戈

(第33図、図版14-1) (福岡県早良郡早良町大字西入部字白塔 838番地)

1963年6月29日の夜から翌30日にかけて福岡地方を襲った大豪雨は、早良地方にも大きな傷痕をのこした。早良町西入部字白塔 838番地三苦金雄氏宅付近は早良平野の波も福のせまくなった部分を東にのぞむ低丘陵に位置するが、おりからの豪雨により、三苦氏宅南側を流れる小溪流はあふれ、それに注ぐ小径も洗われて土砂が流された。7月4日、金雄氏の長男正勝氏が、土砂の洗された小径のところより、この銅戈を発見し、福岡県教育庁に届けたものである。

この銅戈は破損がひどく、完形を保っていないが、復原長40cm程度の中庄銅戈である。現存長28.2cm、闊部現存長11.3cm、復原長13.5cm、身幅は5.2~6.5cm(復原幅)である。被杉文は両方とも外側が不明であるがほぼ判明できる。特記すべきことは、この銅戈の茎に人面が浮彫りされていることである。眉、眼、鼻があり、右眼の部分が病歎して、やや不鮮明であり、口は鋲出されていない。この銅戈は洪水の際に単独出土したので遺構の実態、共伴遺物等はわからないが、弥生後期のものと考えられる。現在福岡県教育委員会保管。(森貞次郎・橋口述也)



第33図 白塔出土の人面鋲出銅戈と頭部拡影



## VI 五島山古墳

### 五島山箱式棺出土の遺物（第34・35図）

五島山は福岡市近郊の南方にあり、筑肥線姫路駅のすぐ裏手で、現在は宅地造成のため削平され、凹状をわずかに仰ぶ程度にしか残存していない。原形は平面三角形の第三紀層の独立小丘陵で、この小丘陵全体を五島山と称し、丘陵東端の一級の高所で、最高位26mを示す高まりを五塔山と称する。報告書によれば「五島山の最も聳望に富める高地」より箱式棺が出土したことである。

大正三年十月十三日、調査地經營のため山林を開墾したさいに、地下50cmのところから、長さ2.4m、幅0.6mで上に3~4枚の蓋石を施した箱式石棺が出土し、内部に鏡・銅鏡・劍・玉類が副葬されていたが、その出土状態については全く不明である。戦後しばらく五島山中央高地に墳丘をもつ箱式棺が覆われているのを岡崎が観察したことがあるが、この箱式棺である可能性がある。

鏡は二面で、ほぼ同様の文様構成をみせる二神二獸の柄輪鏡で、一面（第34図2）は鉢と内区の一部を欠失している。内区に龍虎とそれに直角に二神像を配し、その外方に「□王父西王母」の銘を有する銘帶を配し、外区は锯齒文、複線波文、锯齒文、平縁よりなるが、一面（第34図1）には最後の鋸齒文はない。直径13.6cm（第34図2）と11.8cm（第34図1）である。

銅鏡は無茎銅鏡5本、有茎銅鏡4本の合計9本で、無茎銅鏡は鉢から緩かに丸みを持って刃部を形成し、いったん身紐になって再び間に向かって広がり脇抉を有す。刃部に鉢を有し、身部に銅戈の櫛状の陥没部があり、更に、その中の中心に一段の陥没部がある。長野県伴野出土銅鏡は脇抉、中心の陥没をみないが形態的に類似している。5本共ほぼ同大同形で長さ3.2cm、幅2.1cm、厚さ0.6cmを数える。有茎銅鏡は細部の寸法に小差はあるが、同形のもので一例をとると長さ5.8cm、幅3.3cm、厚さ0.2cmを計る無茎のものより大きい。鉢ちかくは琢磨して鋭利であるが関附近は鈍い。鉢から間にむかってゆるやかに彫れ深い脇抉を有し身部中央に一孔があり、その部位まで鉢を有す。鉄劍は一口が全長44cm、幅3.6cm、一口が全長26.7cm、幅3.3cmを計る。他に硬玉の勾玉2個、碧玉の管玉3個と硝子製の小玉等が出土している。鏡より考えて、古墳時代前期の箱式石棺と考えられる。（下条信行）

### 参考文献

島田寅次郎「五島山の石棺」福岡県報第一編（大正14年）

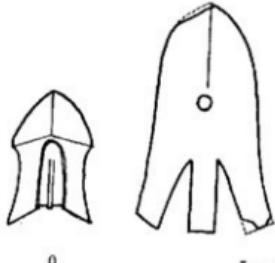
中山平次郎「九州北部に於ける先史原古時代中間期間の遺物に就て」考古学雑誌8-3

中山平次郎「劍鏡に就て」考古学雑誌19-5

後藤守一「漢式鏡」日本考古学大系第一卷



第34図 五島山古墳出土の特異鏡拓影



0 5 cm  
第35図 五島山古墳出土の銅鏡

## VII 重留箱式石棺

早良町重留字浦田の箱式石棺遺物（第36、37図）

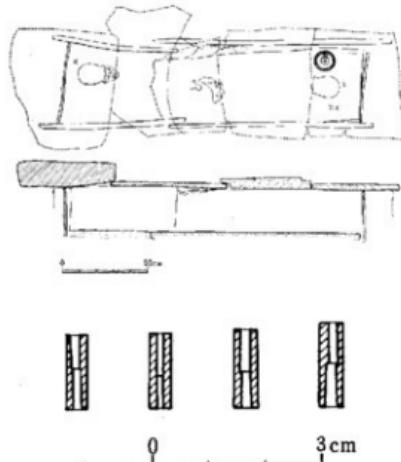
昭和27年10月に、石祠の再建工事にあたって、一基の箱式石棺が発掘され、金岡丈夫・原田忠昭・森貞次郎らが、これを調査した。石棺内には、2体の人物が、仰臥伸展位で、頭の方向を相反して、合葬されていた。人骨は、表面に薄く赤色塗料が附着しており、保存状態は余りよくない。北側に頭を向いているのが男性、南側が女性で、年令は、ともに老年と推定されるが、男性の方が幾分若いようである。副葬品としては、女性頸骨の脛から、直径14cmの青銅鏡1面と管玉4個が発見された。

人骨の計測値は、古墳時代人よりも、弥生時代人、とくに佐賀県三津の弥生時代（中期）人と類似している。女性頸骨の前頭部（冠状縫合の後方に、これに沿ってはしる）の浅い帯状の凹みがみられるが、この凹みは、とくに女性に多くみられ、負載帽による頭上運動の風習により生じた頸骨の変形であろう、という意見もあるから、社会的に優位にあったとみられるこの時代の女性も、少青年期に背中の網袋にいた重い荷の負いづるを前頭にかけて、運搬などの労働に従事する風習があったともみられよう。

鏡は、鳥文鏡ともよぶべきもので、文様の彫りは浅く、銅質はわるくないが、薄手である。文様は、外区に鈕の周囲に珠文帶と斜行線文帶を入れ、やや広い文様帶には、七個の珠文と、七個の鳥文を凸線で入れている。外区は、外行權曲文帶のそとの銘文帶には銘文をもっていない。その外側に複線輪曲文帶があり、その外側は平線になっている。類例はないが、後漢代の獸帶鏡を祖型とする仿製鏡とみられる。鏡面の大部分に精良な細密な鋸歯化したものがみられる。管玉は細いもので、弥生時代のものに近い。

この箱式石棺は、墳丘はみられなかったが、古墳時代前期の古い時期のものとみてよい。人骨は九州大学医学部解剖学教室、遺物は、九州大学文学部考古学教室所蔵。（森貞次郎・佐野一）

頭蓋計測表（単位mm）



	No. 1	No. 2		No. 1	No. 2
頭最大長		176	上顎面高	77	
頭最大幅		130	眼窩幅	45	42
歯小前頭幅	96	95	眼高高	36	
耳高		106	鼻中	25	
水平周		502	鼻高	53	
横弧長		283	口蓋長	50	
頭後頭示数		73.9	口蓋幅	39	
長耳高示数		60.2	顔面示数	119.0	
幅耳高示数		81.5	上顎面示数	73.3	
上頭幅	107	105	眼窓示数	80.0	
中顎幅	105		鼻示数	47.2	
顎面高	125		口蓋示数	78.0	

第36図 重留箱式石棺及び管玉実測図



0  
10 cm



第37図 重箱式石棺出土の鳥文鏡拓影

#### VII 野方発見の珠文鏡

福岡市拾六町毫岐小学校蔵（第38図）

同上野方塚原の古墳出土と伝えるが詳細は明らかでない。青銅質の仿製鏡で、全面青銅に覆われ腐蝕がはなはだしい。計測値は面径6.1cm、反り0.2cm、鉢径1.4cm、鉢高0.5cmを示す。鏡背の文様は手磨れのため磨滅している。鉢孔の作りは非常に粗陋で、孔の両端とも磨耗がはなされていない。円座鉢の周囲に一圓を、その外側に珠文帶をめぐらしている。珠文帶は幅0.35cmで、16個の珠文を一列に配している。珠文帶の外側は直行攝齒文帶、外行陽包鍛齒文帶と続き、幅0.6cmの素縁に終わる。

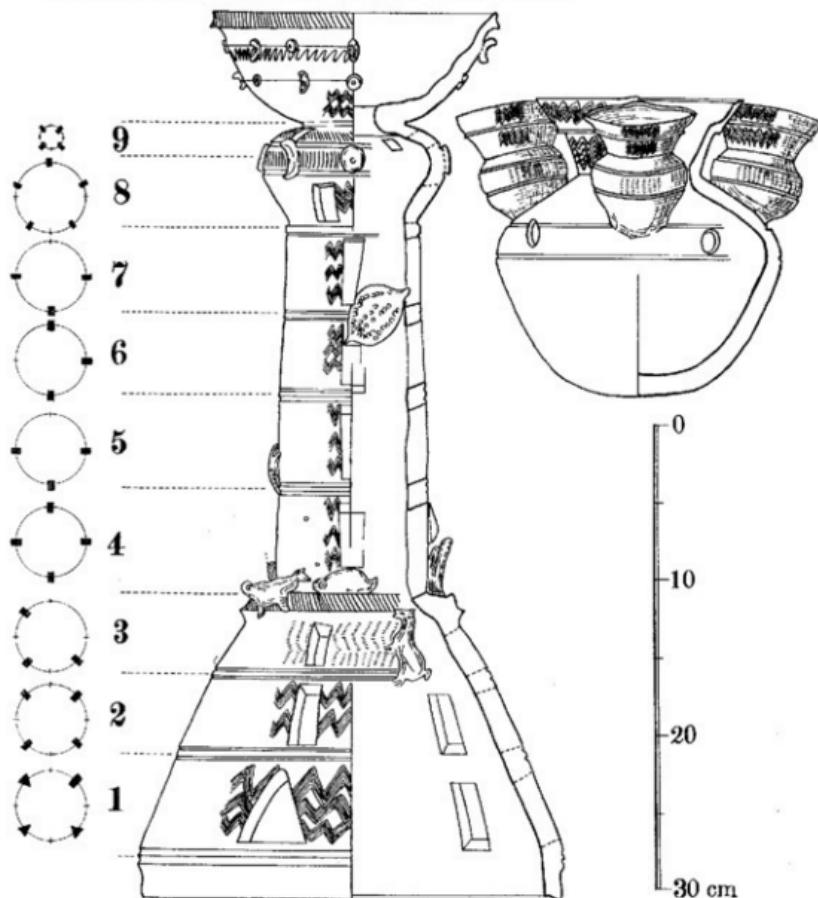
珠文鏡は古墳時代の中期から後期まで見られるが、本鏡は面径6.1cmの小鏡であり、背文構成や製作技法、銅質の低下等の諸点から珠文鏡のうちでも時期の下るものと思われる。（高倉洋彰）



第38図  
野方発見の珠文鏡拓影（原寸）

## IX 羽根戸の装飾付器台と暁

福岡市金武字羽根戸・伊勢神宮御古館農業館蔵（重文）（第39図）



第39図 羽根戸出土の装飾付器台と器実測図

柱状器台に子持ち線を載せた珍品である。須恵器としても古式の特徴を備え、大形線は肩に4個の小線をとりつけ、胸に二つの円孔をあけている。柱状器台は受皿部、円柱部、円錐台部の3部から構成されている。各部にはこの器台を珍品化するための粘土の基材装饰がみられる。先ず受皿部は側面に上下2段の突帯があり、その上に円形と三日月を各段6個づつ交互に並んでいる。更に受皿と円柱の接合部をふくらませて、ここにも円文と三日月文が4個ずつ交互に並べら

れている。次に円柱部は2条ずつの凹線で4段に分けられ、各段1匹ずつの龜がとりつけてあって、あたかも1匹の龜が下から上にラセン状に円柱をよじのぼってゆく過程を表現しているようである。次に円盤台部の上面にはあおむけに顛倒して起きようともがいている龜に吠えついている3匹の犬の姿勢をうまくとらえて表現している。この攻防感を見ているかのように子を背負った人物が傍に立っている。

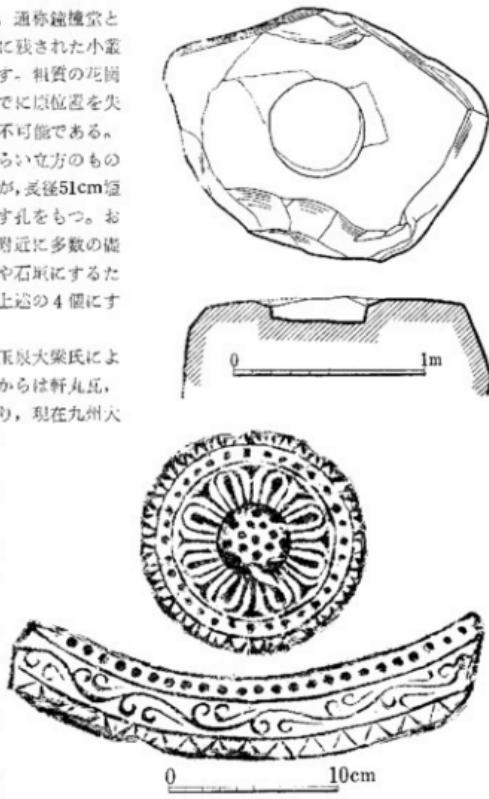
塔台の各段には長方形（最下段には三角形）の透孔が切られているが、これは本来各段四つを原則として計画されたものであったが、飾りをとりつけることを優先したので、両者重なるところでは透孔を省略するような配慮がなされている。（小田富士雄・危井明徳）

## X 城ノ原廃寺（第40図）

福岡市拾六町字城ノ原に位置し、通称鐘撞堂という地にただ一ヶ所草むらのままに残された小叢丘があり、そこに4個の礎石を残す。粗質の花崗岩を加工して作られた礎石は、すでに原位置を失われ、伽藍配置を推定することは不可能である。第40図に示した礎石は約90cmぐらゐ立方のもので現在底石として使用されているが、長径51cm短径48cm、深さ12cmの楕円形を呈す孔をもつ。おそらく塔の心礎であろう。以前は附近に多数の礎石があったらしいが、次第に墓石や石垣にするために取去られ今残っているものは上述の4個にすぎない。

この寺址については昭和6年、玉坂大榮氏によって報告がなされている。この地からは軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、半瓦が出土しており、現在九州大学教養部の玉泉館に所蔵されている。軒丸瓦は單弁8弁のものと、複弁8弁のものがあり、模様には珠文と波文がめぐらされている。軒平瓦は上部に珠文、下部に波文をもち、中心帯は羅行唐草文で形成されている。單弁のものや、羅行唐草文の軒平瓦などは奈良県藤原宮跡に系統をたどることができる。この廃寺の年代もほぼその頃に求められ、奈良時代と考えられる。（佐田茂）

註 (1) 玉坂大榮「若狭村城ノ原廃寺跡」福岡県史籍名勝天然記念物調査報告書第六編 昭和6年3月

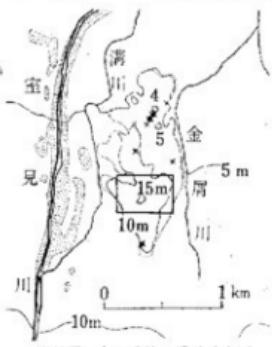


第40図 城ノ原廃寺塔心礎測定図（上） 軒先瓦一起拓影（下）

## 第5章 結び

二回にわたる、発掘調査を通じて得たところの成果に、さらに若干の補足を加えて、結びとしたい。広い面積の地域全体にわたって、短期間の発掘をもって、その全貌をつかむということは、まことにむづかしいことであり、本調査においても、決して十分とは云えないが、ほぼその目的を達したように思う。弥生前期初頭の集落は、ほぼ現在の有田部落の位置に形成されていたようだ、その北を馬蹄形に両するV字状の溝は、標高15m等高線で囲まれた、この丘の最高地点をとりこんでいるが、溝の内側には柵が立てられて防衛的な施設であったことが考えられる。調査地区の南西部にあたる16街区および17街区に、この時期の土器・石器が多少発見されているが、それは、この溝の内側に位置するものであろう。有田部落の両側の、この丘陵の南端に位置する西福岡高等学校構内に、前期末から中期におよぶ壺群が発見されていて、有田部落の弥生集落は、引きつきめに中期まで営まれていたことが知られる。なお、この丘陵の中部をしめる小田部部落の中央部から北の庄原部落にかけて、7ヶ所の壺群が発見されており、そのうちの3ヶ所は前期末から中期におよぶものであり、他の4ヶ所は、中期を中心とした時期のものであることが推定された。したがって、現在の小田部部落の位置にも、前期末から中期におよぶ弥生時代の集落があったことが推定される。つまり、現在集落が営まれている地域が、弥生時代以来、豊饒果実の立地条件として最も適している地域であるといえよう。現在の小田部・庄原の集落が、丘陵の西側に偏しているのは、東側が氾濫として利用されているからであり、丘の東西幅の狭い有田では、畠地を、北部の、今般われわれが調査区とした處に經營しているように、弥生時代にもそうであったとみられる。このことは、麦・粟をすでに栽培していた弥生時代の集落遺跡の観察については、考慮されなければならないことであろう。

次に、これらの集落の社会的関係について考察してみよう。一般に壺群墓地の状況から考えると、幾世帯かをふくむ家族共同体の集団が、一つあるいは、それ以上集って一つの共同墓地帯を形成し、それが幾世代か継続されているから、集落も同様な構成をもっていたと思われる。したがって、この広い沖積平野の中に独立した低い丘陵上に、弥生前期のはじめに、まず南集落ができ、前期末には、北集落も形成されたが、それは、少なくとも三ヶ所三つの家族集団をふくむ共同体であり、南集落に対して、はるかに大きかったとみられる。そして中期以後は、北集落が大きく発展したとみられる。ところで、南集落では、前期末の壺群から細形銅戈が一口（第31図参照）、北集落では、尖物は行方が不明であるが、昭和4年に長峰の細形銅矛（小田部・福田瑞穂氏譲）；昭和30年にも、有田のものより



第41図 有田丘陵の遺跡分布図

大形の細形銅戈が、いずれも壇棺から発見されている（小田部新町・森藤新太郎氏談）。北部落の銅矛・銅戈は、中期の中頃前後のものと推定される。したがって、銅矛・銅戈の副葬が、共同体における指導的地位にある者の存在を示すものであるとすれば、南集落は、前期末以後は北集落に対して劣勢になり、両集落の統合が進行するにあたって、共同体の首長の地位が、南集落から北集落に転移する経過を具体的に暗示しているようにも考えられる。弥生時代以後古墳時代におよんでも北集落の優位は保たれていたようで、松浦塙塚・筑紫櫛塚の二大円墳（第41図参照）は、ともに北部に位置している。ともかく、広い沖積平野の中の独立丘陵上に局限された立地条件をもつこの集落群は、弥生時代の村落社会の分析にはまことに得がたい地域であり、統治的な観察が望まれる。

つぎに、考古学的に、一つの地域をなす、旧早良郡にあたる早良平野の弥生遺跡を概観して、有田遺跡の考古学的地位を考えてみよう（第42図参照）。弥生遺跡の分布は、(1)海岸の砂丘地帯の内側、(2)山麓の丘陵地帯や扇状地、(3)室見川の広い沖積平野の三つの地域に分けられる。(1)はラグーン地帯の縁辺として、初期稲作文化の定着に遡っていたらしく（藤崎）、その後も引きつき集落が営まれる（生の松原の城ノ原・西新町）が、發展性に乏しい。(2)の東西の山麓地帯では、洪積層の低位丘陵の縁辺に、前期末以降の集落が営まれていて、東北部の飯倉（細形銅劍一前期末・夏格）や、西南部の白塔（中広鉢文一後期・祭祀的遺物）（33図・図版14—1参考）などの遺跡が知られており、飯盛山麓の大扇状地末端には後期終末前後の遺跡（都地）が、とくに顯著である。しかし全般的にみると、密集した集落遺跡に乏しい。(3)の室見川の沖積平野は、集落を形成する低い洪積丘陵あるいは微高地に乏しく、標高20mを越える高位扇状地に、はじめて集落遺跡がみとめられる（西篠）。有田遺跡の位置する洪積層の独立丘陵は、北側の標高5m付近までは、当時のラグーン地帯とみられ、西側の室見川の氾濫原は一部に沼沢・荒地を残していたとみられるが、(1)の集落と(2)の集落の性格をあわせちらし、地理的にも、砂丘・ラグーン地帯と、山麓地帯の接点をなすものである。この独立丘陵上に、三口もの鋤利器類が発見されたことも、このような立地条件の優位を示すものといえよう。しかしながら、この独立丘陵周辺の沖積平野は、ここに大集落群が形成されるほどの可耕地帯を持たなかったのではないかとみられる。

つぎに、さらに視野をひろげて、隣接地域と比較して、この早良地域の性格をみてみよう。（第42図参照）東は那珂川流域の旧那珂郡、西は旧怡土郡であり、魏志倭人伝にいう奴國と伊都國、あるいは日本書紀にいう儼県と伊覗縣にあたり、弥生中期後半から後期初頭に比定される、後漢書にいう奴國が、旧那珂郡地方と一致することは、ほぼ誤りあるまい。弥生時代の中期中頃から後半頃かと推定される、旧怡土郡の三窓遺跡及び、旧那珂郡の岡本（大字須恵）遺跡の壇棺が、銅劍・銅矛などのほか、楽浪郡を通じて前漢文化に連結する、30面以前後の鏡を出し、また鏡溝遺跡、岡本遺跡にも、王莽鏡形式の鏡が発見されており、弥生後期初頭の遺物とみられている。怡土と那珂の地域には、このように有力な首長の存在が知られているのに対し、旧早良郡にはそのような存在はみられない。倭人伝の時代になっても、この形勢は変りはなく、『宋唐国（唐津地方）より東南に陸行して五百里で伊都國があり、さらにまた東南に陸行して百里（実際は直線

距離にして約5里)で奴団がある。』として、早良地域は記載にあらわれない。この状態は、この地方に高塚古墳がつくられるようになってからも変らない。すなわち、旧怡七郡地方には18基の前方後円墳が、旧那珂郡には8基の前方後円墳が知られているのにたいし、旧早良郡には一基も知られていない。早良町重留の拝塚(図版13参考)、小田部の松浦殿塚・筑紫殿塚など、径20m以上の大形円墳はみられるが、前方後円墳のような格式を具えたものが、みられないことは、この地域が権力の発達の条件に欠けるものがあったとみねばならない。占有面積においては、他の両地域とあまり変わらないこの平野が、このように権力の発達が不十分だった要因は何であろうか。まず第一に考えられることは、この平野のもつ、自然的条件にもとづくものであろう。すなわち、弥生時代において、この広い室見川の扇状地の中央部は、低平多湿で、しかも上地は肥えておらず、また水田開発の拠点となるべき、低い洪積台地や高燥な堆積面が殆どないため、集落の密度が稀薄であって、有田の洪積台地の如きも、中心的な位置にありながら、この地域の共同体の核となるほどの有力な集落を成長させうる条件をもたなかつたことが考えられる。次には、水陸交通上あるいは商業資源の涵給の上で重要な拠点になる条件を具えている地域ではなかったことによることが考えられる。

しかしながら、それにもまして、権力成長を阻害した大きな要因は、隣接地域との関係ではなかったかとおもわれる。すなわち、弥生時代に旧怡七郡および旧那珂郡地方に、三差あるいは須玖岡本遺跡に示されるような有力な氏族を中心とする地域的な共同体組織が形成されると、その中間地帯は自立性が非常に弱くなる。このような動向は、土着豪族が成長する古墳時代において、もっともよく窺うことができることは、さきに述べたように、この平野に一基の前方後円墳も確認できぬことによって明らかである。在地豪族である郡司にしても、肥君・早良勝・三宅(連の後裔)など、在地的な性格に乏しい氏名が散見する。このような地域的性格からみても、6世紀に入ってから起った筑紫君勢の叛乱以後になって、中央勢力の北部九州渗透の一つの拠点となつたこともまた考えられるところであつて、小田部(田部郷)・戸切(平洋)・野方(額田)などの部蕃名などから、うかがわれる様に、この地域の農民が、豪族や中央豪族の直轄農兵として、その支配下に組み込まれることになったものであろう。

有田の洪積丘陵が、律令時代の田部郷であったことは、間違いないところであります。弥生時代いろいろこの平野の中心的位置を占めるこの丘陵上の集落に、まず田部がおかれて、やがて、ここに奈良時代に属する、獨立柱式に茅か板葺屋根の、大規模な建築物があり、付近に、鉄器製作の工房群をもつ工作所があったことも、首肯できることである。早良の郡衙あるいは郡倉の所在地は、あきらかでない。しかし、この頃も、その有力な候補地の一つである、ということはできよう。条里制の施行にあたつても、このような中央に直結した地域が実施の拠点になつたことが考えられる。早良平野の条理の復元について、日野高志氏の鶴巣塚を得たことは大変幸であった。

本調査で、よくに成果としてあげるべきことは、九州大学農学部育種学教室の協力で、有田遺跡の弥生文化前期初期の炭化米の精密な研究結果が得られたこと、また九州大学工学部治企学教室の協力で、有田遺跡の奈良時代の鉄器製作の工房の金ソクが、実は砂鉄を原料とする「玉てつ

」とよばれる鉄塊であることが確認されたこと、弥生前期初頭の遺跡から出土した窯製石縁の確実な例を、板付について加え得たことなどをあげたい。また、とくに、調査対象の主体をなした、土師器時代（古墳時代前期）の住居址と、これに伴う土師器の編年的考察を試みた。これも、これまで研究資料の少なかった九州としては、はじめての有意義な仕事であるといえよう。

本遺跡発掘調査にあたって、三回三日にわたる尾辺調査を行ったが、資料蒐集や遺跡見学に多大の便宜と援助を与えられた、牛込準一氏（金武・乙石）・吉木武治氏（十六町）・徳原正則氏（石丸）・福田瑞穂氏（小田部）・斎藤新太郎氏（小田部新町）・海津文雄（感ノ原）・壱岐小学校・西福岡中学校・西福岡高等学校、また終始御厚意を得た宿舎の横越増雄氏および西志寺（有田）の一家、さらに、有田土地区画整理組合の各位に深く感謝いたします。（森貞次郎）



第42図 小良平野を中心とする遺跡分布図

図 版

PLATES

$\tilde{A}_{\alpha\beta}^{(k)}$

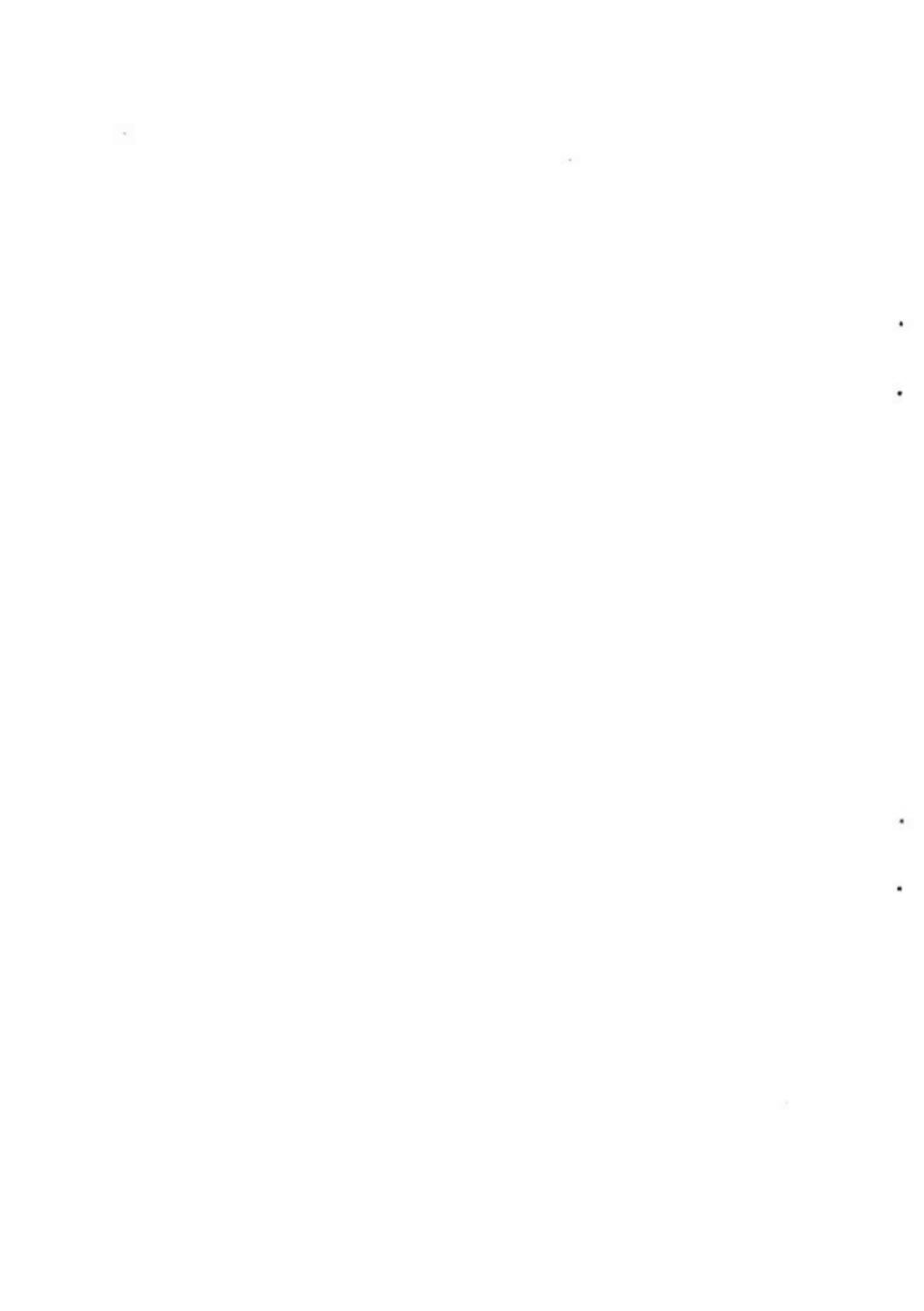
$\tilde{B}_{\alpha\beta}^{(k)}$

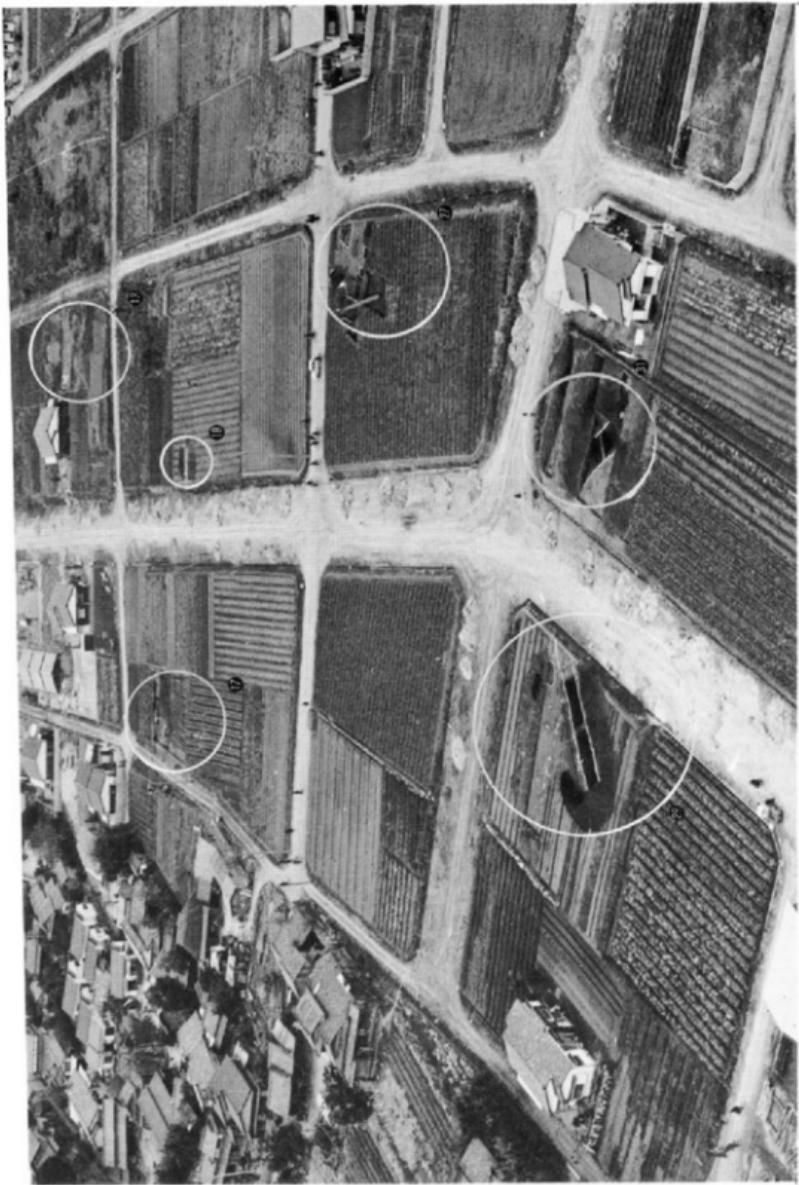
$\Omega_{\alpha\beta}^{(k)} \equiv \tilde{A}_{\alpha\beta}^{(k)} + \tilde{B}_{\alpha\beta}^{(k)}$

P.L. 1

図版第1 有田遺跡周辺の地形（空からの俯瞰）







遺跡全景 東方より望む



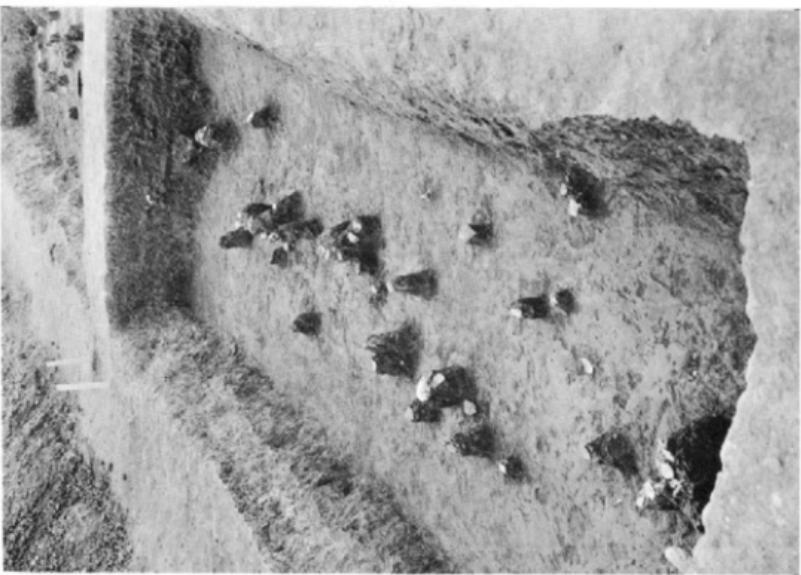


(1) 29(上)、31(下)各街区 北方より望む

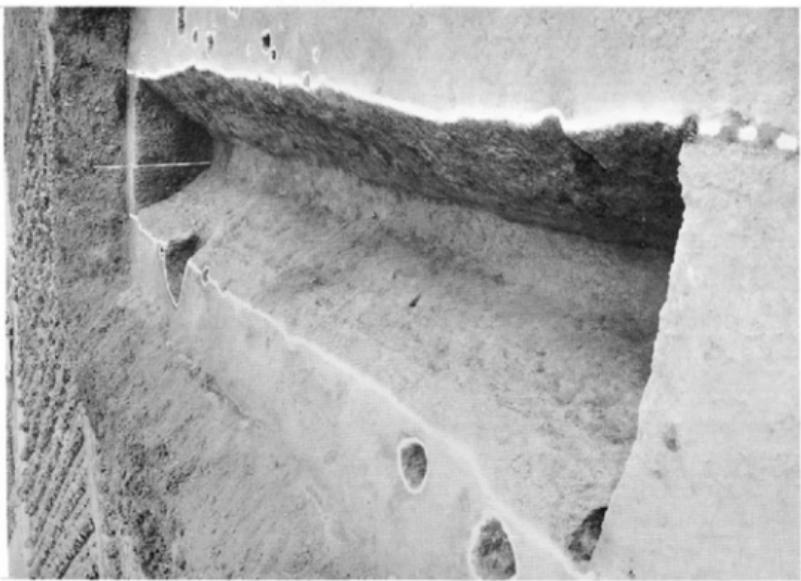


(2) 27(上右)、31(下右)、29(下左)各街区東方より望む



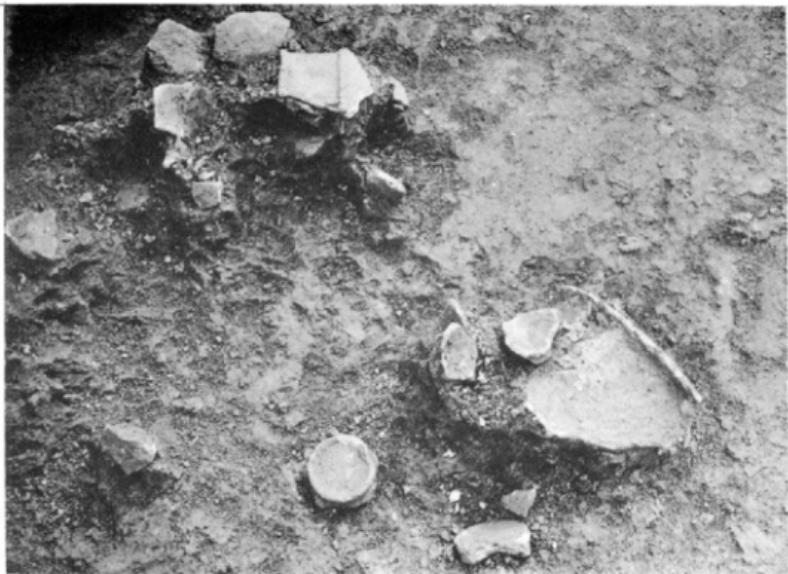


(1) 29街区溝状遺構第三層土器出土狀態



(2) 29街区溝状遺構第三層土器出土狀態



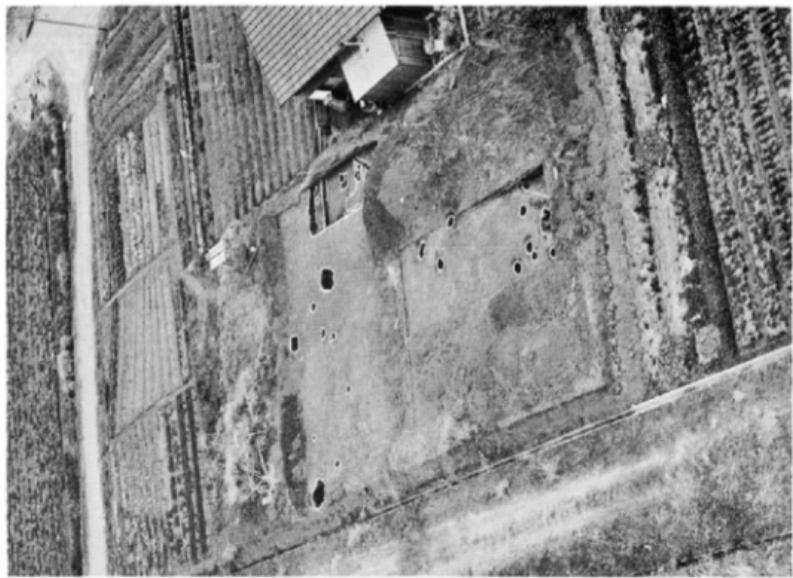


(1) 29街区溝状遺構第2層、土器出土状態

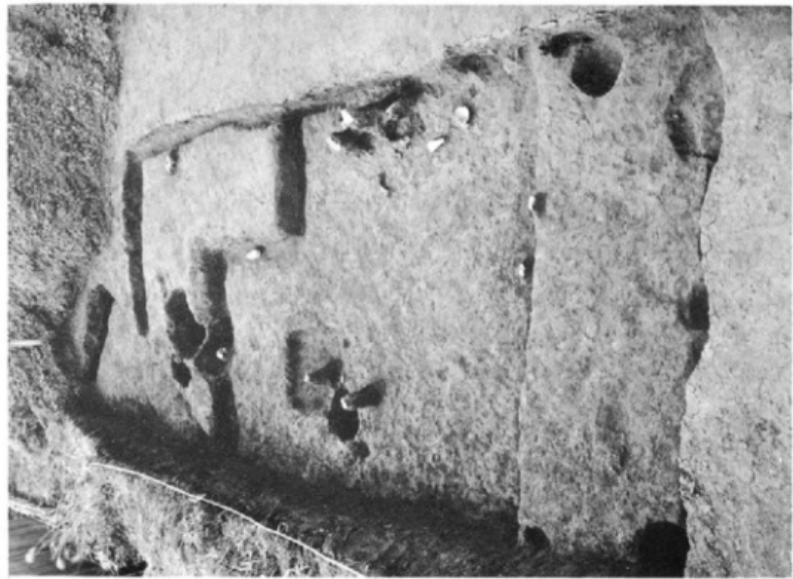


(2) 29街区溝状遺構第7層、土器出土状態



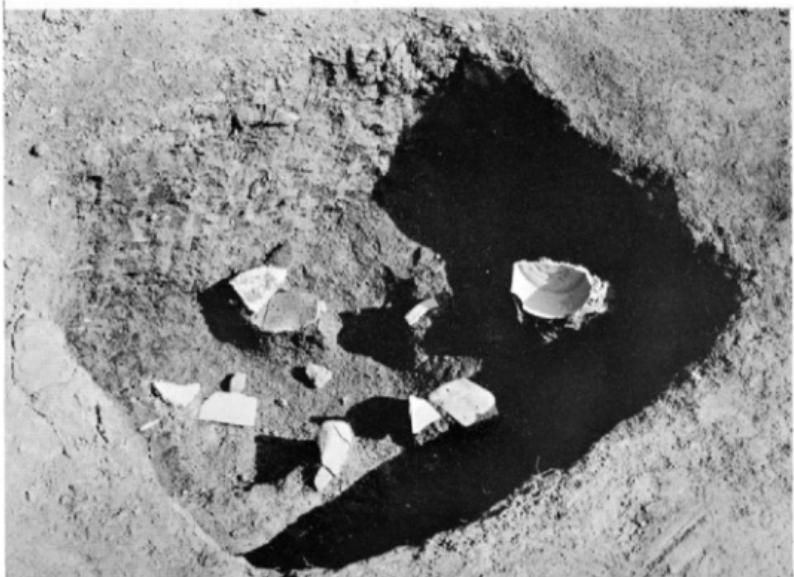


(1) 13街區全景 西方より俯瞰する



(2) 13街區堅穴住居址





(1) 13街区第3号炉址



(2) 13街区 第1号炉址





(1) 17街区全景 東方より俯瞰する



(2) 17街区竖穴住居完掘状態





(1) 17街区竖穴住居址



(2) 17街区竖穴住居址土器出土状态



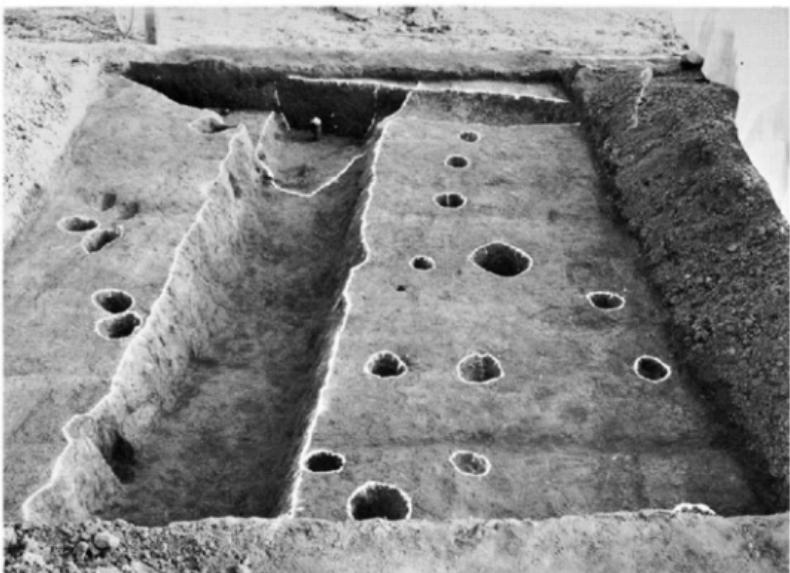


(1) 27 街區第 3 号堅穴住居址



(2) 31 街區溝土器出土狀態





(1) 18街区発掘区域全景

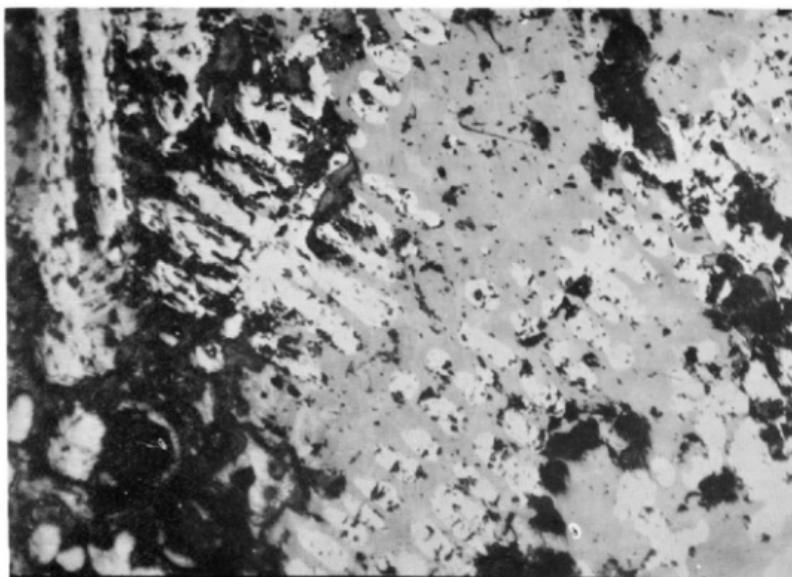


(2) 18街区東西溝土器出土状態





(1) 有田遺跡出土の古代炭化米（約5.3倍）

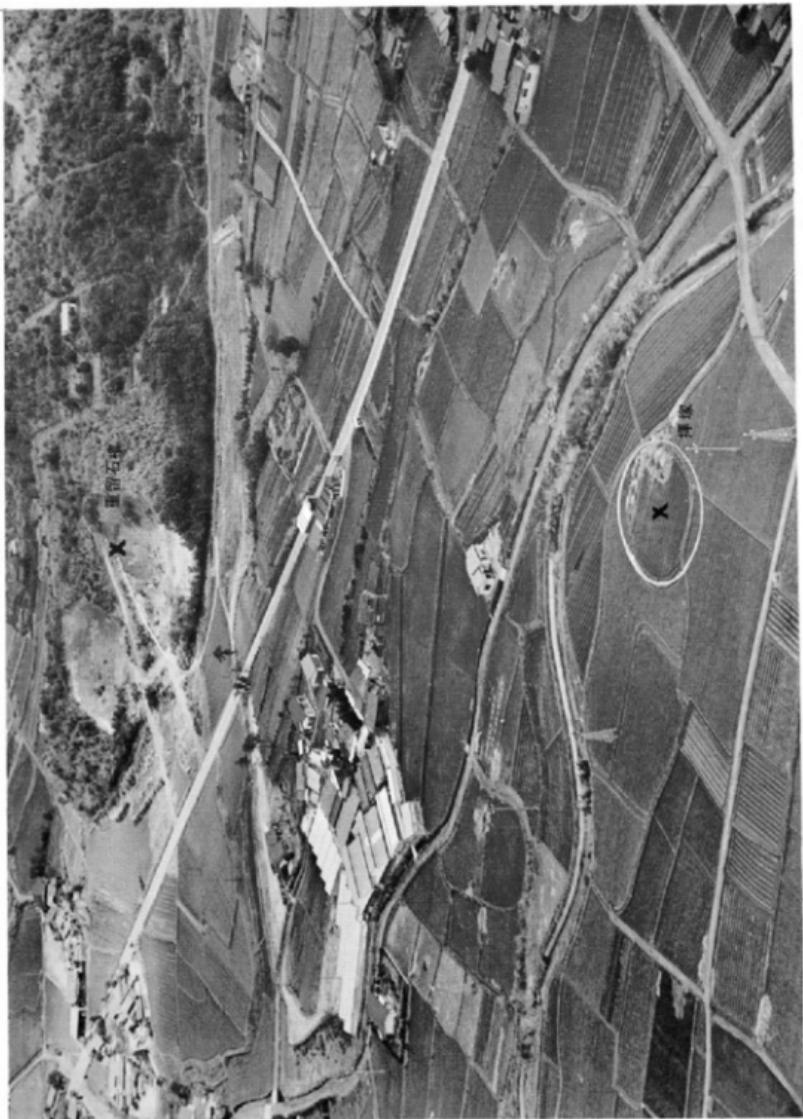


(2) 有田遺跡出土の球状鉄、顕微鏡写真



図版第13 拝塚と重留の航空写真

重留の角式石部のあった位置 ×印 (上)  
拜塚のあった位置 (現庄の跡が黒くなっている) ×印 (下)







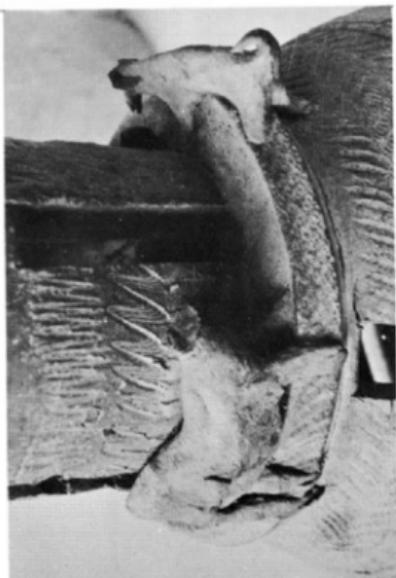
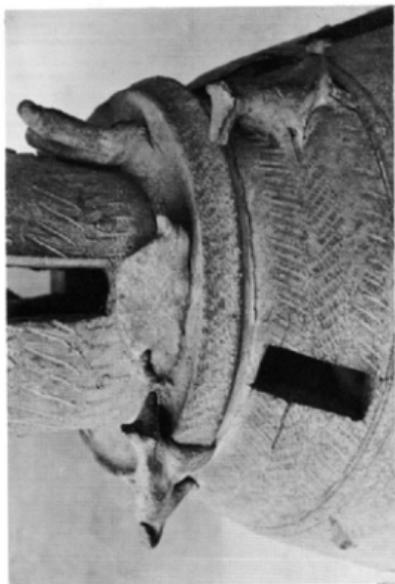
(1) 白塔出土の銅戈



(2) 有田出土の銅戈



図版第15 羽根上出土の装飾付器台細部





## 有田遺跡

昭和43年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会

編集 九州大学文学部考古学研究室

印刷 株式会社 川島弘文社